町あかりの
昭和歌謡曲ガイド

Shōwa Kayō-kyoku Guide

町あかり

青土社

CamScannerでスキャン

まえがき

こんにちは！　シンガー・ソングライターとして活動している「町あかり」と申します。1991年（平成3年）5月28日生まれ（恐れ多くも作曲家の筒美京平さんと同じお誕生日なのが自慢です！）、東京都大田区出身です。自分の曲の作詞作曲はもちろん、他アーティストへ曲をご提供したり、イラストを描いたり、ライブの衣装も自ら制作しています。物心ついた頃から、とにかく作ることが大好きなんです。それはもともと「言葉で自己表現するのが苦手だから」という性格によるものだったりもするかも……。思っていることがうまく説明できなかったり、気が弱くて言い出せなかったり、そういった憤りを言語表現以外の「創作活動」にぶつけてきたんですよね。そんな、もともと文章表現が大の苦手な私ですが大好きな歌謡曲についてならば……と今回意を決して筆を執った次第であります。

CamScannerでスキャン

中1の頃からサザンオールスターズの大ファンである私。当時、音楽番組で『君こそスターだ』（2004）を演奏する姿を観て、それまで音楽には一切興味がなかったのに「こ、これだー!!」と雷が落ちたように突然マイ・ブームに。サザンの全アルバムはもちろん、桑田佳祐さんのソロ、KUWATA BAND、原由子さんのソロ、その他桑田さんによる提供曲など隅から隅まで毎日聴いていました。当時ノートや机に好きなアーティスト名を書くのが流行っており、周りには「KAT-TUN」「EXILE」「氣志團」と書く子が多い中、もちろん私は「SOUTHERN ALL STARS」（英語表記にしてるのが今思えば可愛い）とカラーペンでめいっぱい可愛く書いていたのも良き思い出です。

歌謡曲に興味を持ち始めたのもサザンがきっかけ。「サザンがデビューした1978年はどんな歌が流行っていたのかな？」と調べたところまずはこの年に「微笑がえし」をリリースし、解散したキャンディーズが検索でヒット。「なんてキュートなのだろう！」と感激し、それ以来「歌謡曲・沼」へズブズブとハマることに……。また、2007年夏に亡くなられた作詞家の阿久悠さんの追悼番組も入門編として大変に貴重な資料でした。当時はニコニコ動画が大ブームでYouTubeにもレア映像が日々更新されており、毎日夢中になってチェック。休みの日は中古レコード店、神保町の古本屋、浅草のマルベル堂へと足

を運び、まるで宝探しのよう……と言えば美しいですが、実際には掘っても掘ってもキリのない「底無し沼」という感じ（笑）。

こうして、偶然出会って気に入った曲をただただ愛してきた私。大ヒット曲もB級と呼ばれる曲も、私の中ではどちらも同じくらいの「マイ・大ヒット曲」なのです。よって、リアルタイム世代から「なんでそんなこと知ってるの？」と言われることも、逆に「こんなに有名な曲を知らないの?!」と驚かれることもあります。また、私が「歌謡曲後追い世代代表」では一切なくて、もっと詳しい後追い世代もたっくさんいます！　珍しいレコードや雑誌をたくさんコレクションしている、変態みたいな子もわんさか（笑）。ただ、詳しければ偉いんじゃなくて過去作品の配信リリースも増えつつありいろんな世代の人が歌謡曲を楽しむことができる今、「その人にとっての歌謡曲」を自由に語っていいんですよね。この『町あかりの昭和歌謡曲ガイド』は、歌謡曲との出会いを機に音楽を生業にしちゃった、ちょっとおかしな平成生まれが語るガイドブック……ということでお楽しみいただけたら嬉しいです。

このガイドはこのような構成になっています。

第1章　歌謡曲の一番の魅力は、なんてったって「ドヤ顔！」

コンピューター・グラフィックによるキャラクターがおしゃべりする模様をネット配信する「バーチャルYouTuber」。私も好きでよく観ています。

2019年には、NHKスペシャルで『AIでよみがえる美空ひばり』という番組も放送されました。どれも魅力的だけど、なにか物足りない……。そう、それは「ドヤ顔」!! 昭和の歌謡曲を彩る名シンガーたち。キラキラ、そしてギラギラとしたあの表情につい手を合わせて拝みたくなります。

第2章　メンヘラという言葉が生まれる前から、歌謡曲は愛に向かって大暴走！

ネットで生まれたスラング、「メンヘラ」という言葉。否定的な意味合いで使う人もいますが、恋愛における「メンヘラ」ってものすごく愛情深い人のことですよね。歌のテーマとしては最高！　というか、それって「歌謡曲あるある」じゃない？　SNSで炎上しかねない濃厚な愛をテーマにした歌謡曲に、後追い世代もシビレています。

CamScannerでスキャン

第3章　知ってる？　景気のいい時代は「ディスコ」っていうのが流行ってたんだって！

うちの母は若い頃、仕事帰りに同僚とディスコに行っていたんですって。自宅でYouTubeを観るのが一番のリフレッシュ、という私とはかなり違う世界かも……。だけどその頃に大流行したディスコサウンドを聴けば、世代などまったく関係なくアガります！

第4章　時代は変われど、10代の心は今も昔も変わらない！　普遍的なティーンズ歌謡

時代によって、メイク、ヘアスタイル、制服のスカートの丈や、靴下の長さに至る細かい部分まで「流行り」って異なりますよね。それでも進路や人間関係、恋愛に悩む気持ちはどの時代も一緒。だから後追い世代だって歌謡曲に共感するのです。今のティーンたちも時を超えてハマるはず？な昭和の名曲たちです。

第5章　なんとも言えない、グッとくるこの気持ち……。すっごく「エモい」歌謡曲！

「エモい」という言葉。一説によれば英語の「emotional」が語源で、感情が揺さぶられたときに使われます。「今年の新語2016」のランクインをきっかけに話題になったそうですが、これは歌謡曲を聴いたときの気持ちを表現するのにもピッタリ……。むしろ、昔

は、この「エモい」気持ちを表すときになんて言っていたのかな？

第6章　温故知新！　超貴重な歴史資料的歌謡曲たち

昔はネットも携帯電話もなかったんですよねぇ。「SNS疲れ」気味の私たちにとって、昭和の歌謡曲の世界がちょっぴりうらやましく思えるときがあります……。そして、昭和の文化を知ることで今の時代が見えてくることも。歌謡曲は"たった3分間"でその時代を知ることができる、とっても貴重な文化資料です。

そんな歌謡曲好きが高じて、2018年8月から「町あかりの歌謡曲研究所」というイベントを新宿ロックカフェロフトにて定期開催。以前からイベントやインタビューでも交流のある、鈴木啓之さん（アーカイヴァー、音楽ライター）と長井英治さん（女性シンガーソングライター専門家、音楽ライター）という超・強力な有識者のお二人にご協力いただき、毎月「ザ・ベストテン特集」「畑ひろみさん特集」「83年デビュー組アイドル特集」などテーマを設定して3人でトークしてきました。レコードやCDを持ち寄って、ロックカフェロフトのハイ・レベルな音響環境で歌謡曲を聴きながらみんなでお酒を飲みつつあー

だこーだと歌謡曲談義……。最初は「トークが苦手」だと不安に思っていたのが嘘のように、鈴木さんと長井さんにも乗せられて（笑）、楽しくしゃべりすぎてしまい終了予定時間を超えてしまうこともしばしば。

ありがたいことにゲストの方が参加してくださる回もあります。ものすごい知識量と貴重な資料をご用意いただいたチェリーさん、ちあきなおみさんを愛するシンガーのギャランティーク和恵さん、レアな映像をご持参いただいた音楽ライターの濱口英樹さん、なんとテレサ・テンの「空港」を50枚も集めた（？）漫画『レコスケくん』でもお馴染みのイラストレーター本秀康さん……など、歌謡曲への愛がモリモリの皆さんです。

お客様からの「勉強になる！」「みんなで歌謡曲を聴くのが楽しい」というSNSでのクチコミのおかげもあり、満席になる回も徐々に増えてきました。そんな中、新型コロナウイルスによるイベントの活動自粛が始まりました。6月にサザンが生配信ライブを開催した（約50万人が視聴したんですよね！）ように、この「歌謡曲研究所」イベントも生配信での開催を計画中です。こうしてネット上で気軽に配信音源を聴ける今、ぜひこの本やオンライン・ライブをはじめとする、私なりの新しい音楽の楽しみ方を発信していけたらと日々模索中であります。

CamScannerでスキャン

ところで、実はもともと「昭和歌謡曲」というワードに違和感を抱いていました。だって昭和って64年まであるんですよ(笑)。一括りにするにはあまりに広すぎる！　それこそこの言葉に抱くイメージはひとりひとり異なるでしょう。だけど素晴らしくキャッチーであることも確か。私は２０２０年の夏にシンガー・ソングライター活動10周年を迎えます。これを機に、そういった細かいことを気にするのはやめたのです（笑）！　この本では前述のとおり大好きな「１９７８年」前後を中心に選曲。そして今年は昭和歌謡曲をもっと知りたい、という想いから「青い山脈」「丘を越えて」を始めとする、今まで触れてこなかった「戦前、戦後の歌謡曲（流行歌）」のカバーにも挑戦します。

私は、昭和歌謡曲を聴くことで「今」を知ることができる点に最も魅力を感じています。「昭和に生まれたかった」と思ったことはなく、むしろこうして平成に生まれ、先入観なく自由に昭和の名曲を楽しむことができる環境に喜びを感じているのです。

またこの度は、観光バスのはとバス様からガイドさんの制服を拝借して表紙の写真にて着用いたしました。この本のタイトル『町あかりの昭和歌謡曲ガイド』の「ガイド」から「バスガイドさんの制服を着たい！」と思いつき、ご連絡したところなんとご快諾いただい

たのでした。ちなみにこちらは夏の制服とのこと。上品で爽やかなデザインでとても素敵ですよね！　大変貴重な経験をさせていただき、感激です。さらにバスのお写真もお借りしたのですが、こちらは１９８０年頃に活躍していたはとバスだそうです。レトロで可愛い！

あらためて、ご協力いただいたはとバス様、ライブの写真をご提供くださった小堀健一さん、そして鈴木さんと長井さんをはじめとするお世話になったみなさまへ心より御礼申し上げます。

町あかり

２０２０年6月30日

町あかりの昭和歌謡曲ガイド　目次

CamScannerでスキャン

まえがき　1

第1章　歌謡曲の一番の魅力は、なんてったって「ドヤ顔！」　19

『ザ・ベストテン』飛行場の滑走路で歌っちゃう生放送！
松田聖子「青い珊瑚礁」（1980）　21

ピンクの全身タイツ「ミスティー」に夢中
桜田淳子「ミスティー」（1981）　25

ひばりお嬢さまは男装の麗人！
美空ひばり「柔」（1964）　29

ジュリーはやっぱり華やかじゃなくちゃ！
沢田研二「あなたに今夜はワインをふりかけ」（1978）　32

ひろみは美術室のダビデ像？
郷ひろみ「ハリウッド・スキャンダル」（1978）　36

「まっ赤な女の子」は、いやらしい？
小泉今日子「魔女」（1985）　39

第2章　メンヘラという言葉が生まれる前から、
歌謡曲は愛に向かって大暴走！　43

CamScannerでスキャン

お葬式で流したいくらい大好き！　岩崎宏美「未来」（1976）　45
81年の片隅に力強く咲くタンポポ　谷口美千代「三味線師ロンリー・ブルー」（1981）　48
ちょっとアブナイ「洗脳歌謡」？　しのづかまゆみ「パパはもうれつ」（1974）　52
別れる予感しかない！　恋人依存歌謡　サーカス「愛で殺したい」（1978）　55
お酒が出てくる歌謡曲に憧れました　しばたはつみ「夜はドラマチック」（1978）　59
紅白　2時間45分のテンポ感。まさに合戦！　ジュディ・オング「麗華の夢」（1980）　62
爪を切る歌、いいよね？　中森明菜「SOLITUDE」（1985）　65

第3章　知ってる？　景気のいい時代は「ディスコ」っていうのが流行ってたんだって！　69

阿久悠先生お得意の?!　〝ポパイ歌謡〟　片平なぎさ「オリーブの華麗な青春」（1976）　71
トランス状態！　アツアツのディスコ歌謡　川崎麻世「ラブ・ショック」（1977）　74
高見知佳「シルエット」（1979）
優雅「胸さわぎ」（1974）

実力派シンガー、トシちゃんへ勝手に感謝状！ 田原俊彦「カフェ・バー物語」(1983) 77
2人は決して〝泡沫〟じゃない！ ピンク・レディー「うたかた」(1980) 80
平成生まれのベーシストも絶賛 麻丘めぐみ「夏八景」(1976) 83
当時SNSがあったら絶対バズってた スペクトラム「F・L・Y」(1980) 86

第4章 時代は変われど、10代の心は今も昔も変わらない！ 普遍的なティーンズ歌謡 89

妙にエモい？ 1985年の名曲たち 橋本美加子「メロウ・シーズン」(1985) 91
森川美穂「教室」(1985)
岡本舞子「愛って林檎ですか」(1985)
当時のオールディーズ・ブームを彩った1曲 成清加奈子「ハートのピアス」(1984) 95
21世紀に「80年代擬似体験」 川島恵「ミスター不思議」(1982) 98
80年代らしさが詰まっている文化遺産 近藤真彦「ロイヤル・ストレート・フラッシュ」(1983) 102
「不作」じゃないじゃん！ 息の長い83年組 松本明子「♂×♀×Kiss」(1983) 105

キャンディーズ・フォロワーなだけじゃない！　ザ・チェリーズ「？Question」（1980）　109
哲平クンはホンモノ！　渋谷哲平「スタント・マン」（1978）　112

第5章　なんとも言えない、グッとくるこの気持ち……。すっごく「エモい」歌謡曲！　115

「お姉さん歌謡」が大好物　秋ひとみ「哀愁ＢＯＹ」（1980）　117
グランプリ受賞でも「普通の女の子」の道を選ぶ……　小野香代子「さよならの言葉」（1977）　120
70年代の女の子によるポエムの雰囲気　八神純子「窓辺」（1978）　123
シティ・ポップはあたたかい　東北新幹線「Up and Down」（1982）　128
ボサノヴァ歌謡は大人への階段　五十嵐浩晃「愛は風まかせ」（1980）　131
聖子によるエモい世界へようこそ……　松田聖子「トロピカル・ヒーロー」（1980）　135
ヒロリンでさえ緊張のあまり「どうぞよろしく！」　山口百恵「夢先案内人」（1977）　138

第6章　温故知新！　超貴重な歴史資料的歌謡曲たち　141
歌謡曲の世界へと導いてくれた3人組！
キャンディーズ「待ちぼうけ」（1976）143
2人の声が激似の「きょうだい歌謡」？
ポップコーン「ブルーロマンス薬局」（1979）148
キューピット「地下鉄ファンタジア」（1979）
ああ、あこがれの湘南歌謡
ラジオっ娘「茅ヶ崎サンライズ」（1982）152
荒木由美子「渚でクロス」（1978）
江原由希子「ちょっとだけ」（1985）
ロサンゼルスの風と岩手の日本酒を感じる名曲？　山口百恵「喪服さがし」（1979）155
海外からのコメントも殺到のアニメ主題歌　シャイ「カンニング・モンキー」（1983）158
藤原美穂「Streets are hot」（1986）
乙女たちによる男気溢れた「いぶし銀歌謡」
西村まゆ子「ひと恋初めし」（1978）161
神田広美「ドン・ファン」（1978）
秋川淳子「南南西」（1978）
あとがき　165

町あかりの昭和歌謡曲ガイド

CamScannerでスキャン

第1章
歌謡曲の一番の魅力は、なんてったって「ドヤ顔！」

CamScannerでスキャン

『ザ・ベストテン』飛行場の滑走路で歌っちゃう生放送！

松田聖子「青い珊瑚礁」（1980）

TBSの伝説的音楽番組『ザ・ベストテン』。あの有名なランキングボードがめくれる音とドラムロールは今もなお、後追い世代をも高揚させています。ちなみに2020年現在でも京急川崎駅のホームの時刻表は珍しくあの「バタバタ」式。この番組に憧れすぎて、駅を利用するたびに「あ、『ザ・ベストテン』だ……」と思いを馳せるほどです。

私も子供の頃から『HEY!HEY!HEY!』『うたばん』など、さまざまな音楽番組を楽しんできましたが『ザ・ベストテン』を観て驚いたのが、とにかく生放送の緊張感が凄まじい！観ていて汗かいてきます。同じ生放送でも『ミュージック・ステーション』では観られないバタバタ感がとても新鮮です。特に中継のシーンが凄いですね。新幹線のホームでの中継で、中山美穂さんが音声トラブルで歌えずそのまま発車してしまったり、トシちゃんが車内で「ピエロ」を歌ったり。映画やドラマの撮影現場での中継も印象的！　キョンキョ

ンがあんみつ姫の格好で歌う姿なんてめっちゃ可愛い！　ファンにとっては超貴重ですよね。

この頃って音楽番組もたくさんあって、撮影やレコーディングやコンサートもあって、当時のスターは本当に忙しかったんだなあというのが『ザ・ベストテン』の映像を観るとよくわかります。

あと中継で衝撃だったのは、デビュー後初登場の聖子ちゃん！　飛行機のタラップを降りて、なんとそのまま滑走路で歌います。そんな悪条件にも関わらず、のびやかな美しい歌声で「青い珊瑚礁」を披露。自分だったら、と思うと本当に考えられないです……。

通常、ライブでは「モニタースピーカー」があって、自分の声と伴奏の音のバランスを調整してもらった上で歌いますからね。こんな中継、信じられないです！　おそらくリハーサルもせず、それらを一発で成功させてきた出演歌手の皆さんの実力がいかにすごいか思い知らされます。

ところで、前述の聖子ちゃん初登場の際に久米宏さんは「こんなに華奢な子、芸能界でやっていけるのかな？」と感じたそう。『ザ・ベストテン』のような長期間続いた番組を一気に通して観てみると、デビュー時には普通の少年少女だったシンガーたちがみるみるう

ちに魅力的な大人へと成長していく様子が見られます。これは意図的に「大人っぽい歌に挑戦する」「大人の芝居に挑戦する」といった経験を重ね、乗り越えた上で得られた結果だと思います。どの歌手も、自身の成長のために路線を変えるターニングポイントがあるんですよね。これは歌謡曲の好きな点のひとつです。

今は「アイドル」という言葉が当たり前のように職業名として使われていますが、私はそこに違和感があるんですよね……。「聖子ちゃんは私にとってのアイドルだ！」という使用が正しいのであって、職業名は「歌手」や「俳優」だと私は思うのです。例えば当時の歌番組で「来年の目標はなんですか？」と問われた際に「こんな〝アイドル〟になりたい」と答える者はおらず、多くの人が「大人の歌が歌えるような歌手になりたいです」等と答えていたように記憶しています。

10代は瑞々しくて素晴らしい年代だと思うけど、いつまでもそこに留まっているのではなく、当時のシンガーたちは自らの年齢に合わせて成長目標を明確に定めて作品に取り組んでいたように思えます。私はそれをリアルタイムで味わえなかった世代ですが、ベストアルバムを聴いて「あ、この曲から声の出し方が変わってるなあ」とか、そのシンガーの変化を感じるのがとても楽しいのです。なんか、アスリートを応援するのに似ているなあ

と思います。

話が逸れちゃいましたが、飛行場で歌っていた「ザ・ベストテン」の頃から今までずっと「アイドル」であり続ける聖子ちゃんを見るとわかるように、いつまでもみんなにとっての「アイドル」でいるためには、漠然と「アイドル」を目指しているだけではダメなのだということ、技術を高めようと切磋琢磨し続けることこそが「アイドルへの道」なのだと気付かされます。

CamScannerでスキャン

ピンクの全身タイツ「ミスティー」に夢中

桜田淳子「ミスティー」（1981）

イベント「町あかりの歌謡曲研究所」でも盛り上がりました、桜田淳子さん特集！ 歌声を聴けば、彼女の真っ直ぐで純粋な心が伝わってきます。「歌」ってその人自身が滲み出るものだなあと、淳子ちゃんを聴いてあらためて感じます。

昔のものまね番組で、鼻にかかったあの特徴的な歌声を真似する人も多いですよね。私も高校生の頃から「花占い」や「花物語」のイントロのセリフ部分をよく真似して遊んでいました。淳子ちゃんの声は一発聞いただけで「あー 桜田淳子！」と誰もがわかるところが素晴らしいのです。そしてそれが作られたものではなく、天然のものである点も。

有名オーディション番組『スター誕生！』がきっかけでデビューした淳子ちゃん。当時のオーディション映像がすごいんです!! 圧倒的美少女であるのはもちろん、最初からすでにプロのような立ち居振る舞い……。だけど大人びていたり生意気な感じは一切なく、少

女らしい表情で一生懸命歌っている姿が愛おしくてたまらない！　秋田から出てきた14歳の女の子が、カメラの前で堂々とリズムを取りながらあんなにナチュラルに笑顔を振りまけるなんて、彼女は芸能人になるために生まれてきた、と言っても過言ではないです。デビュー前から完成されていた、稀有なタイプのシンガーなのだと思います。
なんか、普通に書くだけで全部ベタ褒めになっちゃいまして……。私ってこんなに淳子ちゃんのこと大好きなんだと思い知らされ、そして驚いています（笑）。
ベタ褒めはこの後も続きます。
淳子ちゃんは自身の魅力に比例して楽曲にも恵まれています。それはそれは名曲だらけ。お気に入りを強いて選ぶとすれば、「ひとり歩き」「ねえ！　気がついてよ」「気まぐれヴィーナス」「リップスティック」「サンタモニカの風」「MISS KISS」……、全然絞れていないですが(笑)。メロディの音数が少なくてシンプルな楽曲が多いですね。歌謡曲あるあるの「歌えちゃうイントロ」も多いかも！　物作りにおいて「これ最高だなあ！」と感じた経験の量って大切だと思うんですけど、そういった意味で私は淳子ちゃんの曲からかなり影響を受けていると思います。
ちなみに、イベント「町あかりの歌謡曲研究所」で一番盛り上がった楽曲は「ミスティー」

（1981）！　なんと衣装がレオタード、というか全身タイツ？のようなデザイン。かなり大胆（しかもピンクとゴールドの二種類）！　これをスタイル抜群の淳子ちゃんは難なく着こなしています。そして身のこなしが上品なため全くいやらしくなく、むしろ清々しくさわやかなんですよねえ。

アレンジは、シンセのピコピコ音と、ゴリゴリの生楽器が入り混ざった面白いサウンド。80年代初頭らしい過渡期のアレンジを味わうことができます。『夜のヒットスタジオ』等の音楽番組ではオーケストラがいるため、ブラスが加わったりなどレコードとは異なるアレンジである点も興味深いです。

歌謡曲の面白いところって、例えば1981年だったら「ルビーの指環」のような渋い世界観の曲がヒットした一方で、こういった「ミスティー」みたいなヤバイ（超褒めています）楽曲も流行っていたという点！　歌謡曲を探究することは宝探しと同じなんです。その強烈な全身タイツの衣装も、実は本人のリクエストだったとのこと。サービス精神旺盛で、真面目でピュアな性格が、歌や立ち居振る舞いからも伝わってくる淳子ちゃん。

2018年には5年ぶりにコンサートも開催されたとのこと。そのお姿を私は拝見していませんが、行った方によると「本当にお綺麗だった！」そうです。何年経ってもファン

を楽しませてくれる淳子ちゃん。当時と変わらないのは、お綺麗な容姿だけではないのです。

CamScannerでスキャン

ひばりお嬢さまは男装の麗人！

美空ひばり「柔」（1964）

中学3年生の時、キャンディーズと同時に興味を持って聴き始めたのが美空ひばりさんでした。これはBSで流れていた特集番組を観たことがきっかけ。当時、デパートで開催されていたひばりさんの歴史を振り返る展示を見に行ったこともありました。実際にひばりさんがコンサートで着用したドレスが飾られていたのですが、それがとーっても小さくて！　今でも忘れられません。

中3の私がまず感銘を受けたのは、やはり同世代であった10代の頃のひばりさん。少女時代は特に小柄で幼く見えるひばりさんですが、まるで中に大人の歌手が入っているのでは？と思うほどの貫禄ある歌唱を、初めて聴いたときは驚きました……。

最近レコード会社から発売されたDVDの中に『ひばりのアンコール娘』（1951）という歌謡映画のシーンが収録されており、そこで「星の流れに」という流行歌（当時の娼

CamScannerでスキャン

婦をテーマにした哀歌）の「こんな女に誰がした」という一節を、大人びた身振りと表情で歌うひばりチャンが特にヤバイ!! 歌声だけ聴いたら小学校上がりたての少女が歌っているとは思えない……。「人生何周目？」と問わずにいられません。このルックスとポテンシャルのギャップが妙におかしくて、最高に魅力的なのです。

歌だけでなく、お芝居をするひばりさんも大好きです！ 映画『悲しき口笛』（1949）、『東京キッド』（1950）もBSで放送されていたため、一時期はモノクロの映像ばかり観ており母に呆れられていました。特に好きなのは、映画『ひばり十八番 お嬢吉三』（1959）。彼女が「男装しているお姫様」を演じた時代劇です。まさにリボンの騎士！ ベルサイユのばら！

それ以前に『花笠若衆』（1958）という作品で「男装の姫」を演じているそうで、この設定は人気だったのでしょうか。それらを見事に演じ分けるひばりさん、男装すると本当に男の人みたいに見えるんですよね。

そうそう、ひばりさんの男装といえばやはり「柔」（1964）でしょう！ 言わずと知れた、第7回日本レコード大賞の大賞曲でもある大ヒット曲です。いまあらためて映像を観て聴き返しましたが、なんて元気の出る歌なのでしょう……。感動してしまいました。

CamScannerでスキャン

男性の袴姿に、高い下駄、そして短髪のウィッグ。表情は完全に「柔の道を志す男」。立ち姿も見得を切る姿も、本当に男性にしか見えません。まるで1本の映画を観たような満足感……。この原稿を書いていることを忘れて、15回くらいリピートしてしまいました。

ちなみにスパンコールのドレスで「柔」を歌う映像も見つかりました。これは、ひばりさんがあらゆるジャンルの楽曲に挑戦してこられたという証でしょう。歌謡曲も演歌も、グループ・サウンズもジャズも、すべてお芝居のように演じ分けています。しかしどれにもしっかりと、ひばりさんの「ドヤッ！」が詰まっていて、聴くと本当に元気が出ます。

ひばりさんが亡くなった後に生まれた世代なこともあり、ひばりさんが時代の移り変わりやさまざまな出来事に翻弄されたり、長年闘病されていたことなどをあまりよく知らずに作品を楽しんできました。予備知識や先入観を全く持たず、作品に触れてきた後追い世代ならではの感じ方があるような気がしますね。リアルタイム世代の方々と語り合う中で、そういった違いを感じるのが一番楽しいんですよね！

ジュリーはやっぱり華やかじゃなくちゃ！

沢田研二「あなたに今夜はワインをふりかけ」（1978）

高校生の頃飼っていた文鳥に「ジュリー」と名付けていました。そのくらい、沢田研二さん大好きです！　私がジュリーを知ったのは2007年ですが、ザ・タイガースがデビューした1967年当時の少女たちと同じくらい(?)夢中になっていたと思います。もちろん今のジュリーも昔もジュリーも同じくらい大好きですが、特に70年代頃のジュリーは中性的で王子様のようにキラキラで美しく……。それでいてダークな雰囲気の役もこなす、そんなところに魅了されています。

まずは映像作品の話！『悪魔のようなあいつ』『源氏物語』『太陽を盗んだ男』『男はつらいよ 花も嵐も寅次郎』『ときめきに死す』……。ドラマや映画、いろんな出演作品を観ましたが、思い出深いのは映画『魔界転生』（1981）！　後追い世代はこういった名作をDVD・ブルーレイ、配信で観るしかないわけですが、高校生の頃どうしても映画館で

観てみたくて、放課後にラピュタ阿佐ヶ谷という小さな映画館で『魔界転生』を観たんですよ。「映画館の大きなスクリーンで推しの映画を観る」という行為そのものに興奮したのを覚えています……。

そうそう。ザ・タイガース時代のジュリーによる「あなたにささやくジュリー」というボイス音源を知っていますか？　私は動画サイトで知ったのですが……。当時（1968）、明治製菓のキャンペーン・グッズとしてソノシートに収録されていたものだそうです。「ジュリーが部屋に遊びに来て自作ポエムを披露してくれる」という内容。受け答え出来るような「間」があるので、よく「うん♪ジュリーのポエム聞きたい♪」とか答えながら聞いていましたね……(笑)。最近だとアニメやゲームのキャラのボイスサンプルみたいな感じかも。こういう類の音源、私はジュリーしか知らないのですが他の歌手のもあるかなあ？　もし最近のアイドルやタレントさんでもやっている人がいるのなら、「あなたにささやくジュリー」がそのジャンルの元祖だったり？

マルチに活躍しているジュリーなので、ついつい音楽以外の話で盛り上がってしまいました。ジュリーの楽曲はどれも魅力的で、ここでは語り切れません……。ＬＰも中古レコード屋で購入してたくさん聴きましたので、アルバム曲を聴くと防虫剤の香りを思い出しま

CamScannerでスキャン

す（笑）。きっと、かつて少女だったどこかの女性のお宅のタンスの奥で眠っていたのでしょう。

強いて挙げるならば、シングル「サムライ」のB面、「あなたに今夜はワインをふりかけ」（1978）がイチオシ！　個人的に、派手でキザでナルシストでキラキラしているジュリーが好きなんです。

ジュリーの作品は作詞家・阿久悠先生のご自身の美学、こだわりが色濃く見られます。女性讃歌がテーマの楽曲もいくつかありますが「ジュリーは女性のことなんて別に大切にしなくていいよ！（歌の世界では）」と勝手に思っちゃっています（笑）。

この「あなたに今夜はワインをふりかけ」は、一見、女性のことを思いやっているように見えて「そんな僕って美しい……」みたいなナルシストさを感じるんです。だって「あなたにワインをふりかけて、心まで酔わせたい……」とか言ってるんですよ。キザすぎる！最高！

テンポもよくダンサブルな楽曲ですが、大きくどっしりとしたサビのメロディがジュリーの歌唱法にピッタリで、とても華やか。ジュリーにしか歌えない名曲です。

現在も活動中で、なんと毎年新曲をリリースしているジュリー。コンサートツアーもか

CamScannerでスキャン

なり精力的。常に挑戦し続けている姿に感銘を受けます。

ところで、私は自分の最新曲を褒められるのが一番嬉しいんです。過去の作品も本当に素晴らしいものばかりですが、きっとジュリーもそうであるはずです。先日ローリング・ストーンズが発表した新曲「Living In A Ghost Town」が大ヒットしているというニュースを見て、そんなことを思ったのです。

CamScannerでスキャン

ひろみは美術室のダビデ像?

郷ひろみ「ハリウッド・スキャンダル」(1978)

「最初、女の子かと思った」というリアルタイム世代からの意見は、〝郷ひろみ初体験〟が「GOLDFINGER '99」(1999)だった私にとって、とても貴重かつ新鮮なものです。そして実際にひろみのデビュー当時の映像を初めて観たときは「女の子みたいというか、中性的というか…。こんな男の子、アリ?!」と本当にビックリでした!

ひろみの曲は、本人が持つそのポテンシャルの高さによって生まれた、製作陣の気合いとこだわりが感じられます。特に「美しすぎるがゆえに妖しすぎる楽曲」シリーズがたまりません! 「小さな体験」「裸のビーナス」「魅力のマーチ」「誘われてフラメンコ」「恋の弱味」など、「えっ、これ聴いていいのかな……(照)」という気持ちになります。なんというか、美術室でダビデ像を見たときの気持ちに似ているような……(?)。

これらの美術作品とも言えるクオリティの楽曲たちがテレビやラジオから当たり前のよ

うに流れ、みんな自然と耳にしていたなんて……。必死になってたどり着いた若い世代からすると、うらやましすぎます！

その他にも「花とみつばち」「花のように鳥のように」のような明るい楽曲もとても魅力的。超ファンキーな「君は特別」も、本当にカッコよくて大好き！　あとはドラマ『ムー』で登場した楽曲、「お化けのロック」「林檎殺人事件」は面白いだけでなく、声クオリティの名曲です……。これらのポップな楽曲にも、本人の妖しさエキスが1滴2滴……、20滴くらい入っていますので（笑）どこか影があり、そこがまた旨味ポイントであります。

例えば大ヒット曲のひとつ「お嫁サンバ」もこの突拍子もない感じが最高ですし、なによりこんなに湿度高めの妖しいサンバは他に聴いたことありません……。ミステリアスな雰囲気を増幅させているのはやはりこの歌声の影響が大きいのでしょう！　このかも、聞けばすぐに「あ！　郷ひろみだ！」と誰もがわかる特徴的な声と歌唱法。長年に渡ってものまねタレントさんのココロをくすぐり続けているのも、スターの証だと思います。

つい特異な歌声やアクションばかりに注目してしまいがちですが、歌唱力、表現力がとにかく抜群！　また歌い方も徐々に変わっていて、常に研究と工夫をされている名シンガー

なのです。
　そんなひろみの楽曲で一番のお気に入りは「ハリウッド・スキャンダル」（1978）！ラグジュアリーなアレンジに、作詞家・阿木燿子さんによるドラマチックな物語。サビの「ぴっしりぴっしり」というパンチラインが脳裏にこびりつきます。「ぴっしり」ってあまり美しいものに対して使う言葉ではないと思いますが、これがひろみの艶やかな歌声と相まって色っぽく感じられます。
　私は「1978年」という年が音楽的にも文化的も一番好きなのですが、このキラキラでゴージャスな楽曲には、言葉にできない「1978年っぽさ」がたっぷり詰まっているように思います。
　最初は女の子のようだった男の子が大人の男性になり……、平成になってからも大ヒットを飛ばし、そして令和もきっと私たちを楽しませてくださる大スター郷ひろみさんに、感謝！

「まっ赤な女の子」は、いやらしい？

小泉今日子「魔女」(1985)

小泉今日子さんは長年に渡って女優さん、歌手として活躍されていますし、その歴史から見るといわゆる「アイドル歌手」だった時期はほんのちょっぴりですよね。しかし私は1980年代後半から2000年頃までの音楽や文化の知識がかなり乏しいのです……。だからキョンキョンの場合もその頃に大ヒットした楽曲たちのことはイマイチ勉強不足でして、やはり1982年にデビューしてから数年間の楽曲に思い入れがあります。

高校生の頃にすごくハマって聴いていたのは「魔女」(1985)！　松本隆先生による歌詞がとーっても良いんです。「あたし普段は地味でお利口にしてるけど、本当はこんなんじゃないんだよ」という強がった少女の心情に、地味な高校生の私は非常に感銘を受け(笑)、気に入ってよくカラオケで歌っていました。

この曲は凝った衣装も何種類かあり、黒地にカラフルなポンポンがたくさんついている、

少し民族衣装的な雰囲気のものが特にオシャレ！　自分のライブ衣装も、毛糸のポンポンを付けて真似て作ったことがあるほどです。
他にも「魔女」では私服のようなラフな衣装で『8時だよ！　全員集合』の出演時に歌っている映像も観たことがあります。それがまた超カッコよくて……。テクノカットのようにもみあげが無いショートカットで、ハイネックのノースリーブ、ロングスカートにエナメルのベルト。足下まで全身黒色なのですが、その靴が厚底なんですよ！　これがめちゃめちゃ可愛くて、シルエットが90年代のようにも見えます。というか、今やってもオシャレ。なんといってもこれをバッチリ着こなしちゃうキョンキョン！　あの芳村真理さんからも「自分をちゃんと主張していて素晴らしい」と称賛されたとか。
あと、キョンキョンによる夏の曲も大好きです。シンシア（南沙織）、（桜田）淳子ちゃん、（松田）聖子ちゃんとは違った、ちょっぴりヤンチャ☆な夏……のように感じてしまうのは、キョンキョンが厚木出身という情報から生まれた先入観によるものでしょうか？「渚のはいから人魚」や「常夏娘」、そして「まっ赤な女の子」も大好きな夏ソングのひとつです。
「まっ赤な女の子」のエピソードとして、キョンキョンは、最初にタイトルを聞いて「大

人ってなんていやらしいことを考えるんだろう」と感じたとか。言わんとすることは、まあわからんでもない?ような気もしますが、恋する女の子のとてもキュートな楽曲だとしか私は思ったことがなかったので、その感想は意外でした！ 当時そう感じたという感受性の豊かさ、ちょっとフツーじゃないハイセンスな感覚。これはファッションリーダー・キョンキョンならではのものかもしれません。

1984年の紅白歌合戦「渚のはいから人魚」で、衣装の帽子のピン留めが甘くズリ落ちそうになったとき、「邪魔だから、いいや！」という感じで帽子を外して歌い続けたことがありました。その思いきりの良さがとってもカッコよくて、何度見てもグッときちゃいます……。こんなこと本人は思ってないと思いますが、「別に着飾ろうがそうでなかろうが、私は私！」と言っているかのような笑顔がまぶしくて、その意思の強さが美しい、名シーンです。

あと、ずーっと前から思っていた、キョンキョンの好きなポイント！ 歌って踊っているときに「なんでこんなことしてるんだろう（笑）」みたいな、手を抜いてるのではなく、なんか常に一歩引いて自分を俯瞰で見ているような感じがするんです。

特に当時、アイドル戦国時代でみんながむしゃらに仕事をこなしていたと思うのですが、

CamScannerでスキャン

そんな中でもどこか余裕でクールで落ち着きに見えるキョンキョン。ファンの勝手な先入観かもしれませんが(笑)。そんなキュートさとクールさを兼ね備えたカッコいいキョンキョンを、心の中で「一推しさん」と勝手に呼ばせ、お慕いしております。

第2章

メンヘラという言葉が生まれる前から、歌謡曲は愛に向かって大暴走！

CamScannerでスキャン

お葬式で流したいくらい大好き！

岩崎宏美「未来」（1976）

何度聴いても飽きない曲ってありますよね。いつ聴いても新鮮な気持ちで聴ける曲。私にとって、岩崎宏美さんの「未来」（1976）がまさにそれ。

とにかくこの曲が大大大好きで、この熱い思いをどうやって表現すればいいのか……と考えたときに、「死ぬまで聴きたい。もう、お葬式でも流したい」と言ったところ「〝未来〟を、葬式で!?」と盛り上がり、以来ずっとそう言い続けています。

私が「ヒロリン」こと岩崎宏美さんを知ったのは、作詞家の阿久悠先生が亡くなった2007年。高校1年生の頃でした。沢田研二さんや桜田淳子さん、ピンク・レディーや石野真子さんなどの、数え切れないほどの名曲を生み出した阿久先生の追悼番組は、昭和歌謡曲ビギナーの私にとって大変貴重な資料。

その中でも、NHK紅白歌合戦で「ロマンス」（1975）を歌うヒロリンの姿があまり

に衝撃で！　日本人形のように可愛らしい女の子が「あなたお願いよ　席を立たないで」と艶やかに歌っている姿。しかも当時17歳になったばかり！　そしてデビュー1年目とは思えぬ歌唱力……。一瞬で大ファンになったのでした。

そんなヒロリンによる5枚目のシングル「未来」は、作曲家・筒美京平先生と阿久悠先生が手掛けた大名曲。とろけるようなストリングスにソウルフルなバックコーラス。そしてヒロリンの、ほんのり色香を含む美しくストレートな歌声。恋に夢中になるあまり彼のことしか見えなくなってしまう、思春期の女の子らしい心情がめいっぱいつまった歌詞。何度聴いても胸を打たれます……。

高校生の頃、号泣にも入れて毎日聴いていたのですが、あのレコードのジャケット（ヒロリンの目がキラキラでまるで未来を見ているかのよう！）がものすごく可愛くて、初めて中古レコード店に入って購入したアナログ盤でもあります。しばらく机に飾っていました。

ところで、ジャズのスタンダードナンバー「聖者の行進」はかつてアフリカン・アメリカンのお葬式で演奏されていた曲だそうです。つい最近このことを知って驚きました。こんなに楽しい曲をお葬式で⁉　これは私が「未来」を流そうとしている感覚と、同じかも

しれません?! しかも「輪廻転生」という考え方からすれば、死は終わりではなくその先「未来」があります……。

考えれば考えるほど、辻褄が合うような気が……? いずれ「未来」がお葬式の定番曲になっちゃったりして? そうなったら楽しいなあ。

CamScannerでスキャン

81年の片隅に力強く咲くタンポポ

谷口美千代「三味線師ロンリー・ブルー」（1981）

イベント「町あかりの歌謡曲研究所」では、「81年デビュー組」を特集したこともあります。この年は薬師丸ひろ子さん、伊藤つかささんら、瑞々しい女優さんがデビューシングルをリリース。歌をメインに活動している方とは異なるナチュラルな魅力があるんですよね。

また、賞レース新人賞のラインナップが一味違うのです！ 日本レコード大賞で最優秀新人賞を獲った近藤真彦さんを始め、沖田浩之さん、竹本孝之さん。演歌では山川豊さん、そしてこの回新人賞唯一の女性が演歌デュオ「祐子と弥生」。

ちなみに前年1980年の新人賞はトシちゃん（最優秀新人賞）、聖子ちゃん、河合奈保子ちゃん、岩崎良美ちゃん、そして「帰ってこいよ」の松村和子さん。

さらに1982年はシブがき隊（最優秀新人賞）、松本伊代ちゃん、堀ちえみちゃん、早

見優ちゃん、石川秀美ちゃん。これらに比べると圧倒的に男性率が高いのです。

他にも、この年はイモ欽トリオ、堤大二郎さん、ひかる一平さん、新田純一さん（デビュー曲「ＨｏＰ・ＳｔｅＰ・愛」は名曲です！）、「メモリーグラス」の大ヒットでアイドル的人気を誇った堀江淳さんなどなど、１９８１年は特に男性アイドル大充実の年だったのですね。

他にも、この年の日本レコード大賞曲は寺尾聰さん「ルビーの指環」。現在海外でも大人気、大滝詠一さん「A LONG VACATION」も大ヒット。さらに前述の80年デビュー組も力を増して大活躍。

もしこの頃にタイムスリップ出来るならずーっとテレビを観ていたいです……。音楽番組もたくさんあったでしょうし、本当に楽しいだろうなぁ……。ただ、ブルーレイ・レコーダーで気軽に録画できないのだけが残念！

さて、そんな大盛り上がりの１９８１年音楽界の片隅に、さりげなくそして力強く咲く一輪のタンポポ……（？）のような名曲があります。この年にデビューした谷口美千代さんの「三味線師ロンリー・ブルー」です。

私は「歌謡曲研究所」のイベントで毎回そのテーマに合わせて1曲カバーをするのです

CamScannerでスキャン

が、数あるヒット曲を尻目にこの曲を選んで歌いました。それほど大好きなのです！
前年に大ヒットした「帰ってこいよ」を意識したようなテーマ。なんと、すぎもとまさとさん作曲、ちあき哲也さん作詞という超一流の制作陣。そりゃあ名曲だわ！　内容は、三味線弾き（通称ロンリー・ブルー？）に恋をする女の子のラブストーリー。状況的には、今で言う「ガチ恋」のファンが裏で「推し」と接触してしまう（！）という、ＳＮＳ時代だったら炎上モノの話です。しかし、ちあき哲也さんによる巧みな情景描写、繊細な表現がとても美しいロマンチックな歌詞なのです。
そして肝はサビの最後、「Hold me tight」をコロッコロのこぶしで歌い上げます。英語の音数や発音などは完全に無視！　まさにアバンギャルド……。私にとっては、１９８１年のナンバー1ヒット曲なのです。
ちなみにこの年に生まれたヒット商品は、今も愛されている「雪見だいふく」「ガリガリ君」や、一世風靡した「なめ猫」など。あと「アクアフレッシュ」のあのカラフルな歯磨き粉が流行ったとか。イベントでも「赤と青、画期的だったよねー！」と盛り上がる、リアルタイム世代の鈴木さんと長井さん。私はアクアフレッシュは生まれた時から普通にあったので、「え、色が付いただけで何がすごいんですか？」と率直な意見を述べてしまったた

め、「おじさんたちを馬鹿にしてる?! 昔は単純だったのっ!」とキレられてしまいました（笑）。

もし今の私がタイムスリップしても、当時のリアルタイム世代と同じ感覚や感動は味わえないかもしれませんね。引き続きこの令和時代で、昭和時代の音源や映像を楽しむことにします……。

CamScannerでスキャン

ちょっとアブナイ「洗脳歌謡」？

しのづかまゆみ「パパはもうれつ」（1974）

歌謡曲には、「こういうテーマの曲って他にないよね」とか「今では当たり前だけど、この曲がそのパイオニアだよね」みたいな、発明のような楽曲がたくさんあります。

革新的な楽曲を多数発表された作詞家の阿久悠先生は、時代に寄り添った歌詞を書くために新聞を切り抜いてスクラップブックに毎日貼っていたとか。

そして私のイチオシ曲、しのづかまゆみさんの「パパはもうれつ」（1974）も、阿久先生のスクラップがきっかけで生まれたのかな?!　と思うような、とてもユニークな楽曲です。こちらはオーディション番組『スター誕生！』がきっかけでデビューされたしのづかまゆみさんの1枚目のシングル。パパが娘の外出や恋愛をもうれつに邪魔する……という内容です。

「今日はどんなことあったと　あれこれとたずねられて　まるで窮屈な毎日」

「パパ　パパ　あなたは　私の人生　めちゃくちゃにしてしまうの　狂わせたいの」

そういえば私の友人にも、大学生なのに門限が21時の子とかいましたし、「誰とどこで会うのかを親に必ず言わなきゃいけないから、デートしづらい……」と言って悩んでる子もいました（笑）。

基本的には昭和にも平成にも、そして令和にも見られる普遍的な親子のお話だと思います。しかしこの曲はラストの歌詞が衝撃的！

「だけどもあなたの愛情は　誰よりも大きいわ」

「パパ　パパ　あなたは私の恋人　心から愛してるの」

「パパ　パパ　あなたは私の神様　叱られて撲られても　仕方ないのね」

これはいわゆる「洗脳」でしょうか……。そして親子の話に限ったことではないテーマのような気もします……。

しのづかまゆみさんのパンチのある歌声で、とてもノリがよくポップな曲調なのでついつい楽しく聴けちゃいますが、歌詞をよく読むと結構コワイのです！　阿久先生は当時どんな記事をスクラップしていたのかな……なんて、想像しながら聴くのも面白いです。

ところで、しのづかまゆみさんはその歌唱力を生かしてものまね番組でもブレイクし、さ

CamScannerでスキャン

らに作詞家としても活躍されているとか。なんて器用な方なのでしょう……。当時は「マルチタレント」っていう言葉はあったのかな？

そして今回調べて初めて知ったのですが、私が大好きな「スペクトラム」の「F・L・Y」という曲も、なんとしのづかさんの作詞だそう。うわー、感動です！　しかしどういうきっかけで突然スペクトラムの楽曲の作詞を!?　今はインターネットでなんでも調べられる時代ですが、検索しても全然出てこない歌謡曲情報もまだまだたくさんあるのです……。

生き字引の皆さん！　今後の後追い世代のためにも、ネットへの情報掲載をぜひお願いいたします。

別れる予感しかない！ 恋人依存歌謡
サーカス「愛で殺したい」（1978）

何度も申していますが「1978年」という年に、妙に思い入れがあります。
大好きなキャンディーズがこの年の4月に解散。そして大好きなバンド、サザンオールスターズが6月にデビュー。その時に生きていたわけではないのに「もっともっと知りたい！」と、なぜかずっと気になっている年なのです……。
そしてこの頃を語る上で外せないのが、当時「Mr. サマータイム」「アメリカン・フィーリング」が大ヒットしたグループ「サーカス」。
男女4人グループだから、構成としては当時大ブームだった「和製ABBA」とも言えるかもしれませんが、決して二番煎じではなく全く別の魅力があるのです。
都会的でおしゃれで大人っぽい雰囲気に、特に高校生のころとても憧れました！ ヤフオクでLPを数枚セットで落札したりもしたなあ。

CamScannerでスキャン

その中でも特に好きでよく聴いていたのが、「愛で殺したい」（1978）。「Mr. サマータイム」と同様、海外の曲のカバーで元はフランス語とのこと。訳詞はなかにし礼先生です。出だしから「はなれないで　躰をはなさないで　コーヒーなんか　わかしに行かないで」という、超・束縛ソング！　しかも情熱的なサンバ。

2番も「はなれないで　口づけ休まないで　タバコなんか吸わしてあげないわ」と続きます。こんなにアツアツということは、付き合い始めなのかな……？　しかしこのままだと長くは続かないってことは、誰が見てもわかります。わかっていないのは本人たちだけ……。

この曲を聴いて、最近観たユーチューバーの女の子が「彼氏と常にLINE通話してる。寝てる時以外ずーっと。（ええ?!）」と話していた動画を思い出しちゃいました。リリースは40年以上前ですが、時を超えて共感する若者も多かったりして？

実はこの曲、しばたはつみさんも1975年に「私の彼」というタイトルでカバー。こちらもなかにし礼先生による訳詞なのですが、前述のサーカスのものとは大幅に異なる歌詞。恋愛依存がより深刻で、しかもバイオレンス！　出てくる男性のクズ度も大幅アップしています（笑）。

CamScannerでスキャン

この過激なしばたはつみバージョンを初めて聴いたのは、「和ラダイスガラージ」というDJ集団によるイベント。過去の国産レコードを高いテクニックとセンスで繋いでいく、いわゆる「和モノ」DJイベントです。私もライブでゲスト出演させていただいています。ただ耳馴染みのある歌謡曲を流すイベントとは全く異なり、「どこで見つけたの?!」みたいなハイセンスな曲ばかりかかるんです。

私が中3の頃から「こんなイベントあったらいいのに……」と妄想していたものが具現化されたようなイベント。そしてここで流れるその「私の彼」は、フロアの熱気にピッタリでめちゃ盛り上がるんですよ!

「昭和歌謡曲」というワードって少し幅が狭くとらえられがちで、そこに憤りを感じることもあります。歌謡曲って、牧歌的だったり前時代的な古めかしいものじゃなくて、面白くてカッコイイものがたくさんあるんです! 一言では説明できないほど、おしゃれでちょっと変でおもしろくて、新鮮なんですよね。

10代の頃はその想いを共有できる人が周りにおらず悶々としていたのですが、今こうして「和ラダイスガラージ」や「歌謡曲研究所」のイベントを通して多くの人と共感することができて本当に嬉しい限りです。そして私がおばあさんになっても、下の世代の若者た

CamScannerでスキャン

ちと「愛で殺したい」は、サーカスとしばたはつみの歌詞ど[illegible]の方が好き？」みたいな、
楽しい歌謡曲トークができたらいいなあ（笑）。

CamScannerでスキャン

お酒が出てくる歌謡曲に憧れました

しばたはつみ「夜はドラマチック」(1978)

昭和の歌謡曲には「大人の世界」を描いた楽曲も多く、しかも本来お子さまは立ち入り禁止のはずなのに、お茶の間でジャンジャン流れている現象がおもしろい！『ちびまる子ちゃん』でも描かれた、殿さまキングスの「なみだの操」をお父さんとお風呂で歌う、みたいなシーンとか。そういったおかしさも含めて「昭和の大人ソング」が大好きなんです。

もちろんその中には、大人の証「お酒」が登場する曲も多数存在します。どんな味なんだろう？　どういう気持ちになるんだろう？と、10代の頃はこれらの「アルコール歌謡」(？)にとても強い憧れがありました。

特に私が気になっていたのは「ワイン」！

例えば、中3のときから愛聴していたキャンディーズ「やさしい悪魔」にも「ぶどう酒」

というワードで登場。これを聴きながら、ファンタ・グレープみたいな味なのかなあ?と想像していましたね。

10代の頃あまりに憧れて、自作曲にも「ペパーミント・ワイン」というワードを取り入れたことがあります。当時、オシャレなお酒を一生懸命ネットで検索した結果だと思うのですが……。ペパーミント・ワイン、いまだに飲んだことないですし一体どこで飲めるんでしょう(笑)?

そして私が極めて「オトナ」を感じ憧れた歌謡曲のひとつ、しばたはつみさんの「夜はドラマチック」(1978)。作曲は三木たかしさん、編曲は大村雅朗さん。憂いを帯びた、とってもオシャレなボサノバ歌謡です。マツダのコスモという車のCMソングだったそう。ジャケットに写っているのもこの車とのこと。

さらに、阿久悠先生によるウットリするようなロマンティックな歌詞。この曲にも「ワイングラス」が登場します。そして「ラグジュアリー・レディーをはだしにすることが 男の魅力と言えるかもしれない」というすごい出だし……。 キザすぎる! 70年代特有のギラギラとした華やかさで溢れています。

今夜は飾らず縛られず、華やかに踊ろう、と女性に心の解放を促しているのは、同年に

CamScannerでスキャン

リリースされたジュリーの「あなたに今夜はワインをふりかけ」と似ているかも。

この熱いメッセージが、しばたはつみさんのハリのあるのびやかな美声、圧倒的歌唱力で歌い上げられています。はつみさんの歌声ってセクシーなのだけど全くいやらしくなくて、しかも洋楽的なノリがあってカッコイイ！　それがこの曲のオシャレポイントのひとつだと感じます。本当に、いつまでも憧れの曲です。

ところで今調べて気づいたのですが、阿久悠先生は「ワインを浴びる」みたいな表現にも凝っていたみたいで、前述のジュリーの「あなたに今夜はワインをふりかけ」を始め、「Oh!ギャル」では「ワインのシャワーを裸に浴びよう」、研ナオコさん&トシちゃんの「夏ざかりほの字組」では「赤いワインのシャワーで……」と、全然飲まずにふりかけたり浴びたりしています。しかしこれも子供にはできない、リッチな「大人しぐさ」であると言えるでしょう……。

さて、まさにその憧れの大人になった現在の私のお酒事情ですが、ワインなんて最近はスーパーで買った大容量パックのものしか飲んでいませんし、最近は「バイスサワー」というド派手なピンク色のシロップで割る、駄菓子みたいな焼酎ハイがお気に入りです。

うーん、私が憧れていた大人の世界からはかなり遠いかも……。

CamScannerでスキャン

紅白　2時間45分のテンポ感。まさに合戦！
ジュディ・オング「麗華の夢」（1980）

イベント「町あかりの歌謡曲研究所」でも取り上げた、NHK紅白歌合戦。年末に開催したこの回は、SNSの告知によって西城秀樹さんのファンの皆さんが集まってくださり、ヒデキ多めで盛り上がりました！

ヒデキは初出演（「傷だらけのローラ」）から、まるで自身のコンサートのように堂々とした圧巻のパフォーマンスを披露。1978年に歌った「ブルー・スカイ・ブルー」では、そのあまりに優雅な姿にコンサートのアンコールを観ているような気持ちに……。

一方で、出演の嬉しさで感極まって涙をこぼす歌手や、2時間45分の生放送ならではのテンポ感に必死にしがみつく出演者の様子も醍醐味です。『夜のヒットスタジオ』や『ザ・ベストテン』の映像ばかり追っているとなかなか観られない、三波春夫さんや青江三奈さんらベテラン勢の登場もアガリます。

そしてなんと言っても、歌手としても出場した水前寺清子さん、佐良直美さんによる名司会が最高！　今でいう「上司にしたい芸能人ランキング」のトップのような存在ではないでしょうか？

近年の紅白が「お祭り」という雰囲気だとすれば、このときはまさに「合戦」という感じ。それはこのパワフルな女性司会者の存在も大きいと思います。特に白組への煽り文句が痛快で、後追い世代にとっては新鮮。シビれます。

そんな中、紅白の過去映像を観て初めて知った名曲があります。ジュディ・オング「麗華の夢」（1980）です。初めは「魅せられて」の翌年にリリースされた曲かあ」という印象のみでしたが、よくよく聴いてみると面白く、当時の世相が表れた興味深い楽曲なのです。

まるでどこかの国の王妃のような衣装のジュディ。エメラルドグリーンのドレスに、孔雀の羽を模した扇子をはためかせて登場。内容は、ちょっと大人の世界。年の離れた交際相手（パトロン？）に別れを告げるストーリーです。

今まで紳士的だった年上の彼ですが、突然の別れの宣告に余裕を失い、そのうろたえる姿を冷めた目で見ているヒロイン。

CamScannerでスキャン

別れの理由は「一人歩きしてみたい」「私を自由にさせて」というもの。

何か不満があるのか、という彼に、「そうじゃないの」という、ゆるい応答！　これは彼が激昂するのも仕方がないかも。でもこの余裕たっぷりの色っぽい「そうじゃないの～」♪が最高なんです……。

これを聴いて思い出したのが、同時期に公開された映画『男はつらいよ　翔んでる寅次郎』（1979）。桃井かおりさん演じるマドンナは、田園調布出身のお嬢様。親に決められた結婚がどうしても嫌で、結婚式当日にウェディングドレスのまま逃げ出します。「人に決められた順風満帆な道より、どんなに困難でも自分で決めた道を歩む方がしあわせ」と言うマドンナ。相手の男性が振り回されっぱなしなこともあり、もしかしたら『男はつらいよ』の男性ファンの中には苦手に思う方もいるかもしれません。

しかし勇気を出して宣言し、周りを巻き込みながら実行していくマドンナに、私は共感と尊敬の念を抱きます。「いけいけー！」みたいな（笑）。

それは「麗華の夢」に対しても同じなのです。

女性が軽やかに恋をしたり、自由に生きていく様子を描いた作品が、私は大好き！　そしてこういった当時の世相や流行を感じることができるのが、歌謡曲の面白いところです。

爪を切る歌、いいよね？

中森明菜「SOLITUDE」（1985）

魅力的な名曲を多数リリースしている明菜ちゃん。その中でも、私が特にお気に入りなのは「SOLITUDE」（1985）です。

「25階の非常口で　風に吹かれて爪を切る」という出だしの一節がとても印象的で、聴くたびにドキッとするのです。爪を切るのは日常的な行為ですし、奇をてらった表現ではないのですが、それが「25階の非常口」で行われているということから「この人はなにか寂しさを感じて思い詰めているのかもしれない……」なんて、深読みしたくなっちゃいませんか？

多くを語らずに情景描写だけで深く考えさせる、とても秀逸な、すごい歌詞なのです。

それだけに、その人によって解釈が異なる曲だと思いますが、このつかみどころのない感じ……、主人公は「何を考えてるのかわからない」と言われちゃいそうなタイプかも。そ

して「男ならやめなさい　そんな感じね」の部分から、本人にもその自覚はありそう。

突然振られてしまった彼も、なんのこっちゃわからずにきっと必死になって主人公を探していることでしょう。愛する恋人もいて順風満帆にも関わらず、「誰もみなストレンジャー　初めは他人」という思想のもと「ままごと遊び」を嫌って、彼のもとを突然去る主人公。何それ？と思われるかもしれませんが、「Let's play in solitude」という本人なりの哲学があるのです。「めんどくさい奴だな」と言われるかもしれませんが、そういう風にしか生きられない、不器用な主人公。
う～！　なんて愛おしいんでしょう！

ご存知の通り、明菜ちゃんの衣装はとても凝っていて「DESIRE—情熱—」や「TATOO」を始め、印象深いものばかり（私は「SAND BEIGE」の民族風の衣装も大好き！）。だけどこの「SOLITUDE」は、私が見た限りでは黒っぽいシックな衣装で歌うことが多く、他の曲と比べるとかなりナチュラル。それがこの楽曲の「孤独」というテーマにピッタリなんです。

そしてなんと言っても、明菜ちゃんの表現力！

強そうに見るけど、ふとしたことでポキッと折れてしまいそうな危うさを持った、不器

CamScannerでスキャン

用な主人公を演じ切っています。この曲に限ったことではなく、明菜ちゃんはいつも心の底から楽曲のストーリーに共感しその主人公になりきっていて、それは時に、命を削りながら歌っているのでは？とリスナーが感じてしまうほど。

大スターではあるのですが、そのあまりの楽曲への入れ込み具合に、応援を通り越して少し心配になってしまうことも……。本当に、寂しさや憂いの表現に長けているシンガーですよね。この唯一無二の表現が、明菜ちゃんの根っからの素直さ、純粋さから生まれているものであるのも愛すべきポイントです。

次にリリースされた「DESIRE─情熱─」のように、レコード大賞や『ザ・ベストテン』で一位を獲ったり……という記録はありませんが、当時の記録や評価ってあまり気にならなかったりします。私にとっては大ヒット曲です。

「生きづらさを感じる女性」が繊細に表現された、聴き応えのある名曲「SOLITUDE」。今こそ多くの共感を得るのではないでしょうか。

CamScannerでスキャン

第3章

知ってる？
景気のいい時代は
「ディスコ」っていうのが
流行ってたんだって！

阿久悠先生お得意の?! 〝ポパイ歌謡〟
片平なぎさ「オリーブの華麗な青春」(1976)

阿久悠先生って、どうやらアメリカン・コミックの『ポパイ』がお気に入りだったみたい?

片平なぎささんの「オリーブの華麗な青春」(1976)にも、その影響が表れています。ちなみにこれもアレンジ的に、当時のブームによって生まれたディスコ・ソウル歌謡の名曲です! 歌詞の内容は、ポパイの恋人、オリーブ・オイルが主人公の物語(でもこれ、別にアニメのタイアップとかではないのです)。

「あなたとキスするときも 背のびをしない長い脚 私はオリーブ オリーブオイル」

普通のラブソングとして聴くには、背が高くて脚の長い女性以外は共感しづらいです(笑)。だからもう完全に、ポパイのアニメを観るように画を想像しながら聴くのが正解ですね。

この曲がリリースされた1976年の8月は、なんとちょうどピンク・レディーが「ペッパー警部」でデビューした頃。あれもリアルなラブソングというよりは映画の物語のような世界観ですし、この「オリーブの華麗な……」が生まれたのも納得です。

そういえばポパイは水兵さんだから、イントロの明るいトランペットの音はいわゆる海軍ラッパを意識しているのかも？　こういう製作者の遊びゴコロを見つけるのも楽しいですよね。

この曲は、片平なぎささんの歌唱も絶品！　ところどころ、まるでセリフのように優しく語りかける甘い声がとても心地よいのです。あと個人的には、サビの「ポパイで」の部分でさりげなくコロッと入るこぶしがポイント！　歌ってみるとわかるのですが、結構難しい！

実は当時なぎささんは歌を歌うことが嫌だったとのこと。しかしその後女優さんとして大活躍されるなぎささんならではの豊かな表現が、この曲に詰まっていると思います。

私がこの曲を知ったのは、動画サイトで『夜のヒットスタジオ』の映像を観たことがきっかけです。生放送なこともあってかテンポがだいぶ速く、跳ねたリズムなので聴いている方はもうノリノリになっちゃうんですけど、それをなぎささんはステップなど一切踏まず

CamScannerでスキャン

に、スッと直立不動で歌っているんです。

わざとそうしていたのか自然とそうなったのかわかりませんが、どちらにしろそれがすごく印象的で記憶に残ります。長身でスラッとした片平なぎささんが、これまたスラッとしたしっかり者のヒロイン、オリーブと重なって見えるのです。

ところで、阿久先生は他の作品にも「ポパイ」を登場させています。有名なのが、ピンク・レディーの「マンデー・モナリザ・クラブ」の出だし、「錨の刺青を隠したポパイが」の部分。

さらに、これはB面曲ですが、水野ますみさんという方に「ポパイの夢はネイビーブルー」(1981)という曲も書いています。アニメとのタイアップとかコラボでもないのに特定のキャラクター名を出す……、しかも何度も、って珍しくないですか？

阿久先生は映画がお好きだったそうですが、『ポパイ』のようなアニメ作品もよくご覧になっていたのでしょうか？　そしてこの調子だと他にもポパイが出てくる曲、ありそうですね……。「ポパイ歌謡」収集の旅、まだまだ続きそうです。

トランス状態！　アツアツのディスコ歌謡

川崎麻世「ラブ・ショック」（1977）
高見知佳「シルエット」（1979）
優雅「胸さわぎ」（1974）

1970年代のソウル・ディスコ歌謡について取り上げる際に、筒美京平先生による作品は欠かせませんよね！

他の回で挙げた、岩崎宏美さんや郷ひろみさん、桜田淳子さん、そして麻丘めぐみさんの「夏八景」、片平なぎささんの「オリーブの華麗な青春」の他にも、これもこれも！と いう3曲をピックアップしました。

まずは川崎麻世さんのデビュー曲「ラブ・ショック」（1977）。当時なんと14歳の麻世さん、まだまだ「男の子」という感じの初々しい歌声です。個人的な注目ポイントは、サビの最後の「太陽も」の直前のキメ部分。あまりにキマりすぎていてもはや「ドッキリ

大成功！」の効果音のよう……？　これがとても印象的で、耳に残る名曲です。とにかく、超・踊れます。

次は、高見知佳さんの「シルエット」（１９７９）。特にイントロの出だしの２小節が大好きで、気が急くような、ワクワクするようなスピード感がたまらない……。スマホで聴いているのを良いことに、何回も戻してイントロだけ10回くらい聴いちゃうのがクセです（笑）。疾走感溢れる絶品のストリングスが、ドキドキな恋愛ストーリーの歌詞とピッタリ！歌ってみて気付いたのですが、ＡメロとＢメロ部分の歌メロがだいぶ低めの音で、高見知佳さんも結構頑張って歌っているような感じなのですが、グッと抑えて歌うことによって、２人きりになった男女の緊張感たっぷりなシーンが見事に表現されています。そういうことも計算して作られたのかなあ……と想像しながら聴くと面白いですね。

最後の曲は、優雅さんの「胸さわぎ」（１９７４）。彼女は台湾からやって来た当時20歳のシンガー。自国では中学生の頃から芸能界デビューしており、歌にドラマに大ヒットですでにスターだったそうです。

同じ年にテレサ・テンもデビューしていますし、欧陽菲菲やアグネス・チャンのヒットから続く「海外から来たシンガー」によるブームのひとりなんですね。

CamScannerでスキャン

1年経たないうちに日本での活動は終えて、帰国後もヒット曲を出したりドラマや映画でも活躍されているとのこと。デビュー曲の「処女航海」も名曲ですが、私のイチオシはやっぱりこのセカンドシングル「胸さわぎ」！

情熱的な歌詞と相まって、アッツアツのソウル歌謡となっています。「ヘイヘイヘイ」というコーラスとボーカルが重なる部分が本当にかっこいい！

そしてこの曲の構成がおもしろくて、Aメロ、サビ……という区分けが無いというか、全てが一続きのようになっています。やはりディスコを意識してのことなのでしょうか。聴き続けているとトランス状態になってきます……。

そういえば、優雅のことは高校生の時にネット上で知りまして、ある日、上野のレコード店「蓄晃堂」のセール棚で「異国の風」という優雅のLPを見つけて（ポスター&帯なしだったからかな?）、めっちゃ感動して購入した……という思い出があります。優雅の音源はCD化されてますし、なんならSpotify、Apple Musicでもっと気軽に聴けちゃうんですけど、どうしてあの大きなLPのジャケットはあんなにも魅惑的なのでしょうね……。

実力派シンガー、トシちゃんへ勝手に感謝状！

田原俊彦「カフェバー物語」（1983）

感謝状、トシちゃん様。私はあなたのキュートな歌声に大変支えられました。心から感謝の意を表します！

大学の教育学部に通っていた私は、小学校の教員免許取得のために教育実習を受けたことがあります。たったの4週間でしたが、それが非常に大変だったのです……。小学校は全科目を担当するので、1時間目から国語、算数、理科、社会などすべての授業を行います。放課後には子供たちとサッカーをして、帰宅してから実習日誌の記入と翌日の授業の準備。いかに学校の先生が忙しいか！　これを何年間も毎日やっているなんて！　当たり前ですがうまくいかないことの連続で、自分の無力さを痛感する毎日。緊張や悔しさで、休み時間に教員用のトイレでシクシク泣くこともありました……。

CamScannerでスキャン

そんなときの救いが、田原俊彦さんの楽曲たちでした。

毎朝欠かさずトシちゃんを聴いてから学校へ行っていました。最近だと爆笑問題の田中さんを始め、みんながモノマネしたくなるようなあの脱力を感じるキュートな歌い方。思わずクスッとなるようなユニークな楽曲たち。聴いてる者をリラックスさせる絶大な効果があるのです。無意識に癒しを求めていたのか、実習期間中はトシちゃんの曲しか聴きませんでした。

身のこなしが軽やかで、ダンスが得意なトシちゃん。楽曲もダンサブルなものが多いんですよね。その中でもイチオシなのが「カフェバー物語」という曲。シングル「エル・オー・ヴィ・愛・N・G」（これも名曲！）のB面に収録されています。作曲は元スペクトラムの新田一郎さん。一流のトランペッターでもある新田さんおなじみの、軽快なブラスとパーカッションの音色が印象的な名曲。

以前、音楽ライターの安田謙一さんと話したとき「これはスタイル・カウンシル歌謡ですね！」（※スタイル・カウンシルはイギリスのバンドだそうです）と言われたのですが、無知な私には何のことだかさっぱり……（笑）。イントロのキラキラしたシンセの音が妙に切なく聴こえるのは、前述のとおり辛いときに聴いていたからだったりして？　バックの

CamScannerでスキャン

演奏はタイトでキメキメなのですが、トシちゃんの甘い歌声と、なんと言っても私が大好きな「トシちゃんによるセリフ」が入っており、これまた癒しソングとなっています。

「あの　すいません　コーヒー　アメリカンでもう1杯ください」

恋人の不満トークをしている女の子たちに、アプローチをするタイミングを見計らうトシちゃん。これは長期戦になりそう。よし、コーヒーをもう1杯頼もう。そんなシーンがありありと目に浮かび、ドラマのワンシーンを見ているかのよう。

ロックカフェロフトで開催している「町あかりの歌謡曲研究所」のイベントでも「トシちゃんは実力派シンガーだ」という意見で満場一致。歌声で人の緊張をほぐす天才だと思います。その歌声に救われた経験を持つ者として、トシちゃんには感謝してもしきれないのです。

2人は決して〝泡沫〟じゃない！

ピンク・レディー「うたかた」(1980)

歌謡曲に目覚めたきっかけがテレビ番組の「懐メロ特集」でしたので、もちろんピンク・レディーも自然とたくさん聴いてきました。そういった特番で必ず流れる大ヒット曲も大好きですが、私の圧倒的イチオシは「うたかた」（1980）。これも当時流行ったディスコの影響を受けたアレンジです。私はLPの『ピンク・レディー・イン・USA』に収録された英語版の「Strangers When We Kiss」の方を先に聴いていたので、実は日本語版でシングルカットされた「うたかた」の存在は後から知りました。この、三浦徳子先生による日本語詞の情景描写が切なくて味わい深いのです……。

この曲では、珍しく丈の長い純白のドレスを着て歌っています。冷めた大人の関係を描いた、けだるい雰囲気が魅力です。今回調べて初めて知ったのですが、この曲のリリース直前に解散発表をしたばかりだったんですね。そういった事情は全く知らず、普通に上質

CamScannerでスキャン

なディスコ歌謡として楽しく聴いていました……。だから後追い世代の私としては、同じ頃にヒットした「Mr.サマータイム」や「魅せられて」「みずいろの雨」のような「ほんのひとときの愛を振り返り、憂う大人の女性の曲」として楽しんでいたのですが、

「うたかたの夢でもいいの」
「出逢うとき　誰もが他人よ」
「生きている　誰もが一人よ」

という歌詞を、解散発表直後のタイミングで聴いていた当時のファンは、どういった気持ちだったのでしょう……。そう思うと、このダンサブルなアレンジが切なさをより際立てているようにも感じます。

まあ、ついそういった背景に注目してしまいがちですが、あらためてじっくり聴くとデビュー5年目を迎えよりパワーアップした2人の歌声を堪能できる名曲なのです！

さらにピンク・レディーのすごいところは、いまだに現役だということ！

2018年の日本レコード大賞では、高いヒールを履いて踊りっぱなしの6分半メドレーを披露。衣装の早替えなんかもあって、これが圧巻のステージでした。ケイちゃんの名言「今日は、死んでもいいと思って頑張りました（笑）！」には本当に感動して……、テ

レビの前で泣きました（笑）。
そしてどのヒット曲も名曲だとあらためて実感しましたし、それを40年以上経った今となんでもなく高いクオリティで披露してくれるなんて本当にすごい！　ピンク・レディーは決して〝泡沫〟ではなく、これから先もずっと私たちを楽しませてくれる、日本の宝物のような存在なのです。

CamScannerでスキャン

平成生まれのベーシストも絶賛

麻丘めぐみ「夏八景」（1976）

ある日、サポートバンドとのリハーサルの際に、同世代のベーシストから「町さん！　麻丘めぐみさんの「夏八景」って良い曲ですね！」と突然言われました。20代の彼がなぜそんな隠れた名曲を?!　と驚いていると、「ベースの情報雑誌に〝ベースがかっこいい歌謡曲〟っていう特集があって、そこに「夏八景」が載ってて。気になって検索してたら、町さんがギターで弾き語りしてる動画が出てきたんでビックリしたんですよ」とのこと。そうそう、カバーしたんだった！　というか、ベーシスト向けの特集でピックアップされているなんて！

この曲は作曲だけでなく編曲も筒美京平先生。楽器のことなど全くわからない私ですが、そういったアレンジや演奏の中につまっている筒美先生とっておきの隠し味に、無意識のうちに惹かれているのでしょう。

CamScannerでスキャン

「芽ばえ」「わたしの彼は左きき」「女の子なんだもん」など多数のヒット曲を持つ麻丘めぐみさんですが、その中で最も好きなのがこの「夏八景」！　じっとりとした、湿度の高いディスコ歌謡。イントロの雰囲気からすごいんです。夏特有のドキドキ、ソワソワする気持ち……。カンカン照りの中、外に出たときのムワッとした熱気が再現されているかのよう。セミの声まで聞こえてきそうです。このムードと、めぐみさんのおちゃめで表情豊かな歌声がよくマッチしているんですよね。

作詞は阿久悠先生。本当に私は阿久先生のことばかり書いていますね(笑)。ヒット率の高さはもちろん、ものすごく多作な方なのだとあらためて気付かされます。心の底からリスペクトです。

内容は、まさに「日本の夏」ソング。吉田拓郎さんの「夏休み」が小学生なら、この曲は大学生の女の子の夏休みという感じ。そしてこの曲の肝は、サビの最後の歌詞。

「夏はいろいろですほんとに　夏はいろいろですほんとに」

この含みのある言い回しがホント最高！　しかも2回言うところが意味深で良い！

高校生のときに感動して以来、毎年夏には欠かさず聴いてるんです。夕立にあったり花火や海に行ったり、歌詞だけ読めば楽しい夏の思い出なんですけど、サウンドの重厚さが

相まって、ただ楽しいだけじゃなくて妙に胸が締め付けられるというか、お祭りのあとのような切ない気持ちになるんです。

当時の麻丘めぐみさんのファン層からすれば、大学生くらいの男性を中心に、お茶の間でちびっ子が聴くことも想定されて作られた「大衆ソング」だと思うのですが、今になっても音楽雑誌でフィーチャーされ、若手ベーシストも絶賛する現象、素晴らしいですよね。

「良い曲ですね！」と言われて、自分が作ったわけじゃないのにすごく嬉しくなっちゃいました（笑）。

当時SNSがあったら絶対バズってた
スペクトラム「F・L・Y」（1980）

歌謡曲好きなら誰もが知る伝説のバンド、スペクトラム。およそ40年前に解散した今でも根強いファンがいますが、もちろん私も大好きです！
スタン・ハンセンの入場曲として使用された「SUNRISE」（プロレスの知識が皆無なので完全に受け売りですが……）は、乱闘シーンのBGMとしてバラエティ番組等でもよく耳にしますね。
デビュー時からサザンオールスターズと同じ事務所に所属していたスペクトラム。バンドリーダーの新田一郎さんは、サザンの楽曲「いとしのエリー」「思い過ごしも恋のうち」「C調言葉に御用心」などの管弦編曲も行っています。
そしてスペクトラムの前身が「MMP」というキャンディーズのバックバンド。私は中学生の頃からサザンとキャンディーズの大ファンなので、早い段階でこのバンドの魅力に

CamScannerでスキャン

触れることとなりました。奇抜な衣装に、管楽器をクルクルと回し、激しくステップを踏みながら演奏する姿は一度見たら忘れられません。

最大のヒット曲はセカンドシングル「イン・ザ・スペース」だそうで、これも超かっこいいのですが、私が一番好きなのは「F・L・Y」（1980）。上昇していくホーンの音が、歌詞の通り、空を越えて宇宙をフワフワと漂っているような……不思議な浮遊感。この心地よさにハマってしまいました……。

ミステリアスな魅力を持つ新田一郎さんのファルセットボイスと、ギター西慎嗣さんのハスキーでロックな歌声によるツインボーカル。このコントラストもたまらない！　超絶技巧の演奏に、なんと形容すればいいかわからない……ギラギラの衣装。当時SNSがあったらバズること間違いなしです。

トランペッターでありボーカリストの新田一郎さんですが、特筆すべきは多くの名曲を生み出す作曲家でもある点です！　スペクトラム解散後、他アーティストへの楽曲提供やプロデュースを多く行っています。ジュリーの「渡り鳥はぐれ鳥」、トシちゃんの「カフェバー物語」、堀江美都子さんの「茅ヶ崎メモリー」……、あと香坂みゆきさんの「流れ星」も大好き！

CamScannerでスキャン

例えば、私は吉田美奈子さんが他アーティストに提供した曲がとても好きなんですけど、どの曲も「ああ！　美奈子さんらしい！」という感じがあるじゃないですか。新田さんの場合も「新田節」みたいなポイントが詰まっていて、聴いていてとても心地良いんです。これこれ！　これが聴きたかったんだよ！　みたいな。

あとご自身のソロ作品も素晴らしくて、ソロアルバム『SIMULATION』収録の「自由はすぐそこに」が私のイチオシ曲です。これはアラン・パーソンズの「Sooner or Later」の日本語カバーだそう。新田さんのミステリアスな歌声によって切なく仕上がった上質な1曲。これが隠れた名曲になっているのはとても惜しいことだと思います……。私にとって新田一郎さんは、桑田佳祐さんと同様に敬愛するシンガーソングライターのひとりです。

なんと最近、和ラダイスガラージのイベントを率いる永田一直さんのレーベルが、スペクトラムの名曲「トマト・イッパツ」、新田さんのソロ曲「サンライズ・サンセット」を高音質アナログ盤でリリース。これを機に、今後さまざまなＤＪイベントでスペクトラムが流れることになるのでしょう……。令和時代にて、スペクトラム再評価の予感です！

CamScannerでスキャン

第4章

時代は変われど、10代の心は今も昔も変わらない！普遍的なティーンズ歌謡

CamScannerでスキャン

妙にエモい？　1985年の名曲たち

橋本美加子「メロウ・シーズン」(1985)

森川美穂「教室」(1985)

岡本舞子「愛って林檎ですか」(1985)

かつて阿久悠先生が「作詞家憲法15条」というユニークなことをおっしゃっていて、その中に「歌は時代とのキャッチボール」とありました。

戦後には「リンゴの唄」が生まれ、バブル崩壊後に「愛は勝つ」や「それが大事」、「負けないで」が生まれたように、いつの時代にも人の心が求める音楽が作られて来たのだと思います。

今回は1985年について。この辺りからいわゆる「バブル時代」と呼ばれるのだと思いますが、そのイケイケドンドンな好景気に登場した「憂いを帯びた楽曲」がまた趣深いのです。

CamScannerでスキャン

この年のレコード大賞新人賞を調べてみたところ、中山美穂さん「C」が最優秀新人賞、他受賞は本田美奈子さん「Temptation（誘惑）」、小林明子さん「恋におちて—Fall In Love—」、芳本美代子さん「雨のハイスクール」、松本典子さん「さよならと言われて」……。

全部良い曲だけど、なぜこんなに哀愁漂う曲ばかり?! 「新人＝元気&明るい」というイメージに対する逆張りかもしれませんが、時代の雰囲気の影響も少なからずあったのでしょう。

ここからは、そんな1985年にリリースされた〝新人エモーショナル・ソング〟、お気に入り曲を3曲ピックアップ。まずは橋本美加子さんのデビュー曲「メロウ・シーズン」。作曲は小田裕一郎さん、作詞は三浦徳子さん。聖子ちゃんのデビュー曲「裸足の季節」や「青い珊瑚礁」を作られたお二人でもあります。

ユミコ（友人）からの電話だとみんなで映画に行くっていう話だったのに、待ち合わせには気になっていた彼がひとり。なんとふたりっきりのデートに！ という、10代らしいくすぐったくなるようなストーリー。「風が吹く公園」などの情景描写も印象的で、大人が聴いてもキュンとなる名曲です。

そしてこの曲、イントロがすごい！ 音がホワンホワンと少々心地悪く揺れてお

り、不安と期待が入り混じったような恋心が見事に表現されています。一度聞いたら忘れられない名イントロです。

次は、森川美穂さんのデビュー曲「教室」。サビの「突然ですが退学します」という衝撃的な歌詞……。これ、高校を中退しちゃう曲なのです。女性アイドルのデビュー曲史上、トップレベルで暗く重たいテーマではないでしょうか……？

作詞は千家和也さんで、この曲が初の提供作品だったというコモリタミノルさんによる作曲。大ベテランと最新鋭若手のコンビというのも興味深いですね。重厚感のある歌詞ですが「絶望」という感じはなく、特にAメロの軽やかなメロディが爽やかで、風の吹き抜ける教室にひっそりと別れを告げている様子が目に浮かぶようです。

ちなみに、私はのちにリリースされた「姫様ズーム・イン」や「ブルーウォーター」のようなポップな楽曲も大好き！　ご本人のカラッとした雰囲気からしてもそういった曲がお似合いだと感じるのですが、「教室」がデビュー曲として決まったとき森川さんはどんな気持ちだったのでしょう?!

最後は、岡本舞子さんのセカンドシングル「愛って林檎ですか」。うーん、なんて良いタイトルなのでしょう！　恐れ多くも、「町あかりが好きな楽曲タイトルランキング」3本の

CamScannerでスキャン

指に入れさせていただきます！　作詞は阿久悠先生で、作曲は山川恵津子さん（余談ですがB面の「桜吹雪クライマックス」もこのお二人による作品で、これもまた大好き……）。

さて「愛って林檎ですか」について。「何か私に重たいものを　抱かせてしまいましたね」という、なにやら哲学的にも思える抽象的な一言から始まります。しかし一転してサビは「愛って林檎ですか？　食べられますか？」というまるで小さい子からの質問のよう。

このAメロとサビの差から、当時14歳の岡本舞子さんが持っていた「少女から大人への移行」……みたいな不安定さを表しているのかな？と私は感じるのです。奥深い名曲です。

「時代の飢餓感に命中することがヒットではなかろうか」と語る阿久先生。翌年には河島英五さんの「時代おくれ」という名曲を生み出します。最初に聴いたときは「え！　どうしてバブルの頃に〝時代おくれ〟なんて地味な作品を？」と思っていたのですが、これは阿久先生が「時代の飢餓感」を意識して書かれた曲だったのですね。

そうやって、その時代の出来事とヒット曲を同時に見ていくと本当に面白い！　学校の日本史も、特に近代史はヒット曲も細かく明記して、聴きながら学べるような教科書や参考書があったら私ももっと勉強したのに……なんて。

数年前にりゅうちぇるとぺこちゃんが古着を着て登場したとき、その可愛いらしさとともに「80s、90sファッションの進化系?!」と衝撃を受けましたが、80年代の前半にもオールディーズのリバイバル・ブームがありましたよね。

大滝詠一さん「A LONG VACATION」、シャネルズ、チェッカーズ、ザ・ヴィーナス「キッスは目にして!」を始め、50〜60年代にアメリカで流行ったモータウン、ロックンロール、ドゥワップ、ロカビリーを意識した楽曲がたくさんヒットしています。楽曲もそうですが、当時原宿で踊っていたローラー族はファッションも完全に50s風ですね。

私も最初そうでしたが、音楽の流れをよく知らない若い子はこれがリバイバルだと気づかずに当時生まれた音楽だと勘違いしちゃいそう(笑)。そしてこれが当時出始めのテクノや打ち込みサウンドと並行して盛り上がっていたというのがさらに面白い!

CamScannerでスキャン

そんなオールディーズ・リバイバルを彩った1曲、成清加奈子さん「ハートのピアス」（1984）。聖子ちゃんのヒット曲「ハートのイアリング」を意識したのか……？と思いきや、実はこちらの方が約3ヶ月先にリリースされていました。友達の恋人に恋をしてしまった複雑な心境が描かれているのですが、楽曲のポップさと加奈子ちゃんの明るい歌声がさらに切なさを掻き立て、超絶キュンとなるサマーチューンです。

ポニーテールに大きなリボン、パニエで膨らませた水玉スカートの衣装がまさにローラー族の女の子という感じで、とにかく可愛い！　あとポイントはレトロな赤い手袋。あまりに可愛くて憧れて、私もライブの衣装に取り入れたほど……。日本舞踊とバレエ経験者らしい加奈子ちゃんの身のこなしもさすが鮮やかです。

そうそう、このジャンルを語る上で忘れちゃいけないのが、「雅」という女の子の「大胆素敵」（1983）。もうこれ以上ない！ってくらいロカビリーな、隠れた「迷曲」です。雅ちゃんは、どうやら83年に開催された「ミス・ロックンローラー・コンテスト」でグランプリを獲得されたそう。そのコンテスト、何?!　それだけ流行っていたということですね……。

危うい歌声にちょっぴりハラハラですが、さすが「東京ロカビリークラブ」（おそらく

CamScannerでスキャン

ローラー族のグループ）に所属していただけあって、踊りは新人離れしています。彼女も原宿でバリバリ踊っていたのでしょうね。

ところで、これらのオールディーズ・リバイバル、きっかけは何だったのでしょうか？詳細はわかりませんが、あらためて見てみると当時のファンシーブーム×アイドル全盛期×オールディーズファッションの親和性の高さがよくわかります。

最後に、現代版ローラー族、竹の子族である「ケケノコ族」という女の子たちについてご紹介！　２０１７年に結成され、派手なカラーの個性的な衣装を身に纏い原宿を拠点に踊る10～20代の彼女たち。振り付けもオリジナルで、メイキャップやヘアスタイルも独特。竹の子族よりも宇宙人っぽいというか、異星人っぽさも感じられてユニークです。

リーダーのひさつねあゆみさんもお若い女性ですが、きっかけは竹下通りの「ブティック・竹の子」を覗いてみたことだそう。奇妙ではあるんだけど醸し出す雰囲気が可愛らしくて、見ていてなんだか元気が出てきます。

そして自分たちの中で完結しているというより、「もっと自由に、好きなように生きるって楽しいよ！」みたいな、人を励ますような前向きなメッセージが感じられます。リバイバルがリバイバルを呼び、さらに進化していく光景もまた興味深いですね。

CamScannerでスキャン

21世紀に「80年代擬似体験」

川島恵「ミスター不思議」（1982）

1974～86年に放送されていたNHKの人気音楽番組『レッツゴーヤング』、通称レッツヤン。もちろん生まれる前ではありますが、とても思い入れがある番組なのです。というのも、2008年頃にBSで再放送していたため、すでに歌謡曲にどっぷりハマっていた高校生の私は夢中になって観ていました。

今は過去の映像を市販のDVDや動画サイトでいくらでも観ることができますが、どれも断片的なんですよね。大体3分くらいの1曲ごとアップされている動画とか、もしくはひとりのアーティストをまとめたDVDだとか。ひとつの番組をオープニングからエンディングまで通して観られるのって貴重なんですよね。

例えば『ザ・ベストテン』とか断片的にはたくさん観たことありますが、オープニングからエンディングまで通して観たことってないかも……。だからこの『レッツゴーヤング』

の当時の再放送によって、「あ、日曜日だからレッツヤンを観よう♪」という〝80年代擬似体験〟ができる、夢のような時間を得たのです。

見所はやはり番組のオリジナル・グループである「サンデーズ」！　デビューしたばかりの新人歌手（10人前後）たちが歌とダンス、時にはミニコントで番組を盛り上げます。メンバーは数年で入れ替わっていくので、学校の部活っぽさ（プロの世界ですけど）も感じられて、全体に漂う青春のくすぐったい雰囲気がたまりません。川崎麻世さんや渋谷哲平さんを始め、書けばキリがないほど多くのスターたちを輩出。なんとトシちゃんと聖子ちゃんも元サンデーズなんですよね。

手を取り合って踊るトシちゃんと聖子ちゃんはまるでミッキーとミニーのようにお似合いのバディで本当に可愛い！　これが見られるのはレッツヤンだけじゃないでしょうか？　そして2人で見つめ合いながら歌うシーンでの、会場にいる女の子たちによる激しい叫び声も注目ポイントです（笑）。

サンデーズは洋楽のカバーもたくさん披露しています。私は洋楽にめっぽう疎いので、当時のブームを知ることができて非常に興味深いコーナーです。おそらく時間がない中でレッスンしていたでしょうし、緊張していることが画面越しにも伝わってくるメンバーた

CamScannerでスキャン

たの初々しい表情に「頑張れー！」と応援していました。

あと、サンデーズがオリジナル曲を披露する「ヤングヒットソング」というコーナー。これがまたいい曲揃いでして……。これも挙げるとキリがないのですが、その中で私のイチオシは川島恵さんの『ミスター不思議』（1983）。作詞は阿久悠さん、作曲は大野克夫さんです。

両八重歯がチャームポイントの彼女。とにかくよく伸びる歌声が気持ちの良いこと！　そして抜群のこぶしが完全に「アイドル歌手」離れしています。民謡とかやってたのかな？と思い調べたところ、なんと詩吟を学んでいたそうです。レッツヤンの番組内でも披露されたそうですよ！　落ち着きのある雰囲気から、どことなく70年代っぽい雰囲気もあります。それが阿久悠さんによる詞とぴったりハマっているようにも感じますね。

歌詞に出てくる「こはなれ」「青い黄昏」「季節はクレヨンの落書き」、そしてタイトルの「ミスター不思議」というキラリと光るワード・チョイスがどれも本当に秀逸！

「恋をしたなら [illegible]」という節を、当時10歳だった私もテレビの前でたくさん口ずさんでいました。

[illegible]という歌詞とともに流行っていた「ヤング[illegible]」という

言葉。当時を知る大人は「死語だよねー」と今は古臭く感じるのかもしれませんが、私はとても新鮮に感じています。なんだか若者が特別な存在で、新時代の人物に思えるようなキラキラ感！　決してダサくなんかない、名・流行語ですよ。流行った理由がよくわかります。そしてレッツヤンは作曲家の都倉俊一先生や、太川陽介さんを始めその時代をときめく若手シンガーが司会を務めていた点においても、まさに「ヤングによる番組」という感じがしますよね。

このフレッシュ感が他の歌番組と一線を画していると感じます。そしてなんといっても番組内で必ず歌われる「ムーンライト・カーニバル」というテーマソングの存在！　オープニングとエンディングで出演者がステージの前方に集まって歌うのですが、レギュラーメンバーはもちろん、ヒデキや河合奈保子ちゃんなどの常連のゲストもしっかりと口ずさんでいる姿が印象的です。

もちろん私も歌えますよ！　気づけば自然と覚えていました。当時のヤングな視聴者たちもきっとそうなのでしょうね。

ああ、高校生の頃にこの番組をたっぷり味わえて本当によかった！　レッツヤンは時代を超えて、平成生まれの私にとっても青春の大切な思い出なのです。

80年代らしさが詰まっている文化遺産

近藤真彦「ロイヤル・ストレート・フラッシュ」(1983)

またもや大好きな作曲家、筒美京平先生の話をしちゃいます!

80年代の筒美先生の作品について語る際に外せないシンガーのひとり、近藤真彦さん。1980年のデビュー以降、多くの楽曲を作詞家の松本隆先生と組んで書かれています。マッチといえば「スニーカーぶる～す」「ギンギラギンにさりげなく」「ブルージーンズメモリー」のような8ビートのロックテイストな楽曲の印象が強いですが、一方で筒美先生お得意の跳ねたリズムのダンサブルな曲もいくつか見られます。これがまたマッチの「ひょうきんな男の子」感が引き出されていて、キュートで大好きなんです!

まずは5枚目のシングル「情熱☆熱風☽せれなーで」(1982)。それ以前にリリースされたツッパリ・硬派路線とは打って変わって、歌詞もドリーミーでロマンチック。いわゆる「中国っぽさ」を表現するときに出てくるあのメロディで「パラララパッパ……」と

入っているコーラスも印象的。主人公がポニーテールの女の子に恋をするストーリーなのですが、もしかして彼女はチャイニーズ・ガールなのかな?なんていう妄想も膨らみます。マッチがそれまで秘めていた、愛嬌あふれるキュートな一面を味わえる1曲です。

さらに大好きなのは、12枚目のシングル「ロイヤル・ストレート・フラッシュ」(1983)。ファンキーでダンサブルなめちゃくちゃカッコいい名曲です。作詞は松本隆先生。これもツッパリから離れ、トランプのポーカーに喩えてティーンの恋愛模様が繊細に描かれており、とってもオシャレ!

しかも「17歳で知り合ってから2年が経ち、来年俺は20歳になるけどそのときも一緒に生きてくれよ……」といった感じで恋人に告げる歌詞の内容が、実際にデビューから応援している当時のマッチファンの状況とリンクしているのです。なんというファンサービス!　きっとファンの皆さんは熱く盛り上がったことでしょう。

外国の軍服のようなデザインの衣装や振り付けもユニークで、NHK『レッツゴーヤング』ではなんとステージ上で外車に乗って登場する演出も!　これまた、このゴージャスなアレンジに似合うんですよねえ。

そういえばTBS『ザ・ベストテン』でもオープンカーに乗ってこの曲を歌っている過

CamScannerでスキャン

去映像を観たことがあったような。ド派手な演出から景気の良さが感じられ、平成生まれは憧れちゃいます……。こうして俯瞰して見ると、マッチのような存在って70年代にはなかった「80年代」らしさが詰まっているように感じます。

荒々しくて勢いがあって、未熟で完成されていない危うさが魅力の男性シンガー。「クラスにこんなに可愛くてやんちゃな男の子がいたら……」みたいな想像が楽しめそうな親近感。

当時の10代がマッチに親しみを感じていた気持ち、よくわかります。これって70年代のシンガーにはあまりいないタイプで、当時は新鮮だったんじゃないでしょうか？　バイクやケンカがカッコいいという価値観もエイティーズらしいなあと感じますし、マッチの楽曲はそんな80年代の雰囲気を味わうことができる素晴らしい文化遺産です。

「不作」じゃないじゃん！　息の長い83年組
松本明子「♂×♀×Kiss」（1983）

過去に「歌謡曲研究所」のイベントでも特集した「1983年デビュー組」。2018年には「お神セブン」と称して、大沢逸美さん、桑田靖子さん、小林千絵さん、徳丸純子さん、木元ゆうこさん、森尾由美さん、松本明子さんの7名が集まってイベントを開催されていました。そこでご本人たちは「不作の83年組」と自虐して言っているのですが、歌謡曲ファンにとっては人気のある皆さんですし、現在も舞台やラジオ、バラエティ等で活躍されてる方がこんなにいて、当時を知らぬ者としては「83年って売れっ子揃いじゃん！」と思っちゃいます。

ただレコードの売上的に大ヒットとは言えなかったようで、皆さん悔しい思いをされていたようなのです。だってトシちゃんや聖子ちゃんを始め、80～82年のあいだに大ヒットを飛ばすニュー・スターがた～～くさん誕生しており、83年は「アイドル全盛期」の真っ

CamScannerでスキャン

只中。そんな中でデビューした新人がヒット曲を出すのがどれほど難しいことか……。そんな状況を乗り越えた皆さんなだけあって、この「お神セブン」および83年デビュー組は超・実力派なのです。

その中で今回ピックアップさせていただくのは、松本明子さん！ デビューは『スター誕生！』がきっかけ。歌唱力の高さはもちろん、とにかく声が明るくて素直な歌い方にもお人柄が出ていますね。

楽曲もも名曲揃いで、個人的には3枚目のシングル「夏色のギャルソン」（これも名曲……）のB面「続・竹取物語」がお気に入り！ 竹取物語の現代版ソングといった感じの面白いテーマで、「Lady "Bamboo"」……というコーラスもどことなくミステリアス。詞・曲ともに秀逸です。また、こういったユーモアのある曲が似合うんですよね明子さんって！

バラエティ番組「進め！電波少年」を観ていた方は明子さんの破天荒さをよくご存知なのかも。[illegible]

[illegible]

い！」としょっちゅう話題にしていて、あまりに盛り上がったので、深夜番組にも関わらずゲストとしても生出演されていました。そこで、芸能活動ができなくなったときの話や、結婚秘話など、信じられないくらい型破りな方だと知って本当にビックリしまして……（笑）。それを機に明子さんの楽曲にも興味を抱き、その表現力に魅了されました。

さらに、2019年に武道館で開催されたオードリーのオールナイトニッポンのイベントで、明子さんがシークレット・ゲストとして登場してデビュー曲「♂×♀×ＫｉＳＳ」を熱唱。しかもそのときに着ていたのが当時の衣装と同じデザイン（「お神セブン」イベントの時に着ていたものですね）！　私は映画館（ライブビューイング）でリアルタイムで観ていたのですが「ギャ〜！　これ当時の衣装！　最近観た動画だと『おはようスタジオ』（テレビ東京）に出てたときに着てたやつ〜！」とひとりで大興奮だったのですが、その興奮を誰にも伝えられずもどかしかったのを覚えています（笑）。

ところで「お神セブン」の皆さんが開催されたイベントは、なんと2日連続の3公演！　私がかつて観たインタビュー映像では、当時を振り返って『ザ・ベストテン』に出たかったとか、水泳大会ではワイプで小さく映っただけ……という苦い思い出を大笑いしながら話す皆さん。それは現在充実されているという証拠ですよね。

自分のペースで活動を続けたり、臨機応変に方向転換をして活躍されていたり、皆さんの姿を見ていると大変勉強になりますし、元気が出ます。新型コロナウイルスの影響を受けて自らの環境を見直す今こそ、「83年デビュー組的"マインド"」から得られることは多いかもしれません！

キャンディーズ・フォロワーなだけじゃない！

ザ・チェリーズ「?Question」（1980）

ヒットした歌手には、似たような形で後から登場する「フォロワー」という存在がつきものですね。私が大好きなあのキャンディーズのヒット後にも、3人組女性アイドルがたくさん生まれたようです。

例えば、ネット上でも話題になった「スターボー」はご存知の方も多いかも。私も高校生の頃にニコニコ動画で話題になっていたことで知りました。1982年に「ハートブレイク太陽族」でデビューしたスターボーは「性別不明の宇宙三銃士」という特殊な設定で、3人とも刈り上げの短髪に……。かと思えば、セカンドシングル「たんぽぽ畑でつかまえて」ではフワフワフワのドレスを着て聖子ちゃんカットに……という迷走具合からも、当時の3人組女性アイドルが本家キャンディーズを超えてヒットすることがいかに難儀であったかが伺えます。

CamScannerでスキャン

そんな数多いる「キャンディーズ・フォロワー」の中でも私が特にグッときたのは、ザ・チェリーズ。NHKの音楽番組「花のステージ」のマスコットガールとして1979年にデビューした3人組です。イチオシ曲は4枚目のシングル「?Question」(1980)。作曲は宇崎竜童さん、作詞はしのづかまゆみさん、そして編曲は大村雅朗さん。

SHOGUN「Lonely Man」並にかっこいい、ブラス・ファンクの名曲です。宇崎さん節のギターも超渋い！ そしてこの曲の肝はなんと言っても「あたしの一番いい人にゃ」の見得の切り具合！ もはやキャンディーズの影は消え、百恵ちゃんの「プレイバックPart2」や「絶体絶命」のような世界観です。衣装は3人とも、男性の正装を着崩したようなパンツルック。特にセンターのカコちゃんのソバージュのような細かいパーマが、不良度高くてシビれます……。

この曲を知ったのは、高校生の頃に観たNHK『レッツゴーヤング』の再放送にて。3人の色っぽくかつ男らしい雰囲気と楽曲のあまりのカッコよさに大興奮で、すぐにネットで中古レコードを探したのを覚えています。その録画してた放送も100回くらい観ましたよ！

ちなみに彼女たちのラストシングルは、本家・キャンディーズの「やさしい悪魔」を彷彿

させる「私のサタン」という曲。しかも吉田拓郎さんによる作曲で、作詞が喜多條忠さんという点も完全に「やさしい悪魔」と同じ。セクシーでキュートな雰囲気がザ・チェリーズにお似合いではありますが、この奮闘ぶりに少し切なさを感じてしまいます……。

他にも、キャンディーズの妹分として登場したトライアングルを始め、フィーバー、アパッチ、ギャル、きゃんきゃん、麻生真美子&キャプテン、ソフトクリーム……。3人でハモって綺麗に合わせられる音感の良さと高い歌唱力を持つ、レベルの高いグループばかりです。そして楽曲も「キャンディーズのようにヒットさせたい」という製作陣による気合が感じられ、お世辞抜きで名曲揃い。

キャンディーズが唯一無二であったように、それらの3人組たちもそれぞれ他にはない個性を持っていたと思うのですが、それでも当時「3人組」というだけでキャンディーズの大ヒットと比較されてしまっていたのだとしたら、なんだかもどかしいですね……。

ただ、いまだに根強いファンがいらっしゃるんですよね! PerfumeやNegiccoなど平成・令和の3人組の活躍と同様に、「キャンディーズ・フォロワー」リバイバルが来る可能性もありそう?!

CamScannerでスキャン

哲平クンはホンモノ！

渋谷哲平「スタント・マン」（1978）

とある放課後、高校生の私は定期券内にある中古レコード店を巡っていました……（2008年頃）。サザンと沢田研二さんのファンなのでサ行の棚を漁っていたのだと思いますが、そこで渋谷哲平さんのデビューシングル「朝日に向かって」を発見。プロフィール欄に「憧れの歌手：沢田研二」と書いてあり、「ムムッ！　彼は……、売れる！（※とっくに売れてます）」と思ったのを覚えています（笑）。

本当に失礼な話なんですけど、そういうことを考えながら楽しんでいる後追い世代は私だけじゃ無いのでは?!　数日後、哲平クンのシングルレコードを全て購入。というのも、ネットオークションで全部まとめて出品している人がいたんです。これも後追い世代のラッキーなところかも。誕生日にネットで買ってもらったばかりのレコードプレーヤーで一枚ずつ聴いていく中で、彼がジュリーとはまた違った魅力を持つ素晴らしいシンガーで

CamScannerでスキャン

あることがわかったのです。

リアルタイムでＮＨＫ『レッツゴーヤング』などを観ていた方は、やはり「Deep」や「ヤング・セーラーマン」のイメージが強いのでしょうか？　でも素敵な曲、他にもあるんです！

そもそも、オーディション番組『スター誕生！』がきっかけでデビューされたことからもわかるように、哲平クンって実力派なんです。特にロックな歌い方がすごく上手くて、それは「Deep」だとあんまり味わえないのでチョットもったいない！　例えばバリッバリのギターサウンド、「標的」という楽曲でのドスの効かせ方は本当にスゴイ……。「世良公則＆ツイスト」ばりです。

さらに、私のイチオシとして取り上げたいのは４枚目のシングル「スタント・マン」（1978）！　「Deep」の次にリリースされた曲で、これも同じく都倉俊一先生による作曲。当時はピンク・レディーで大ヒットを飛ばしていた先生ですが、これもその〝ザ・都倉先生〟といった感じでキメがたっぷり詰まった曲です。歌唱映像を観ると、腰を振る振り付けにどことなくジュリーの「憎みきれないろくでなし」っぽさがあるような？

「ロンリー・スタントマン　誰かの身代わりにされてただけさ　ふざけた話だよ」

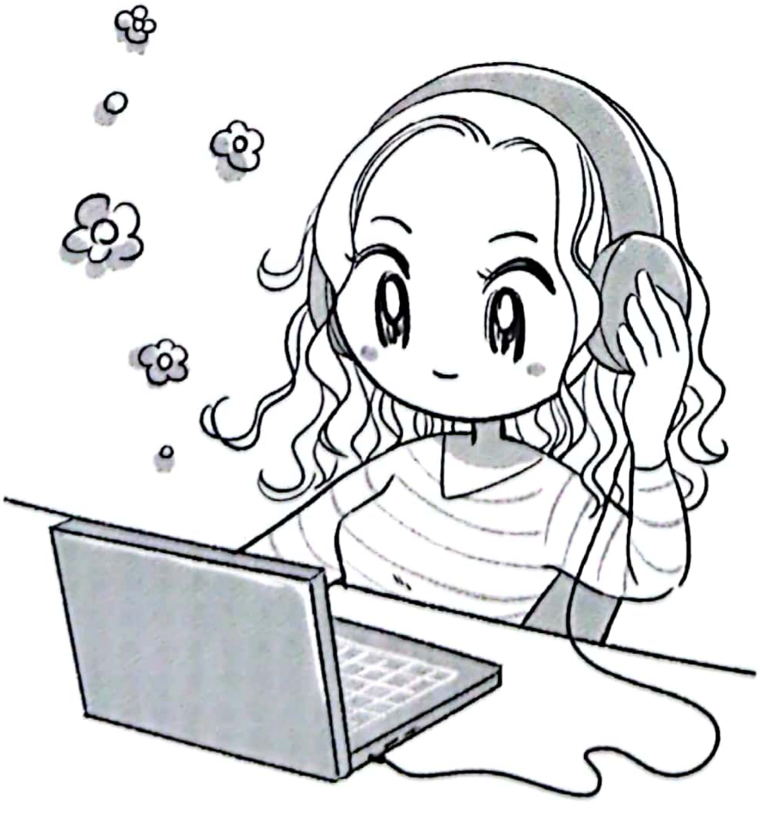
という、失恋エピソードを「スタントマン」とかけた比喩表現もキマってます。この例え方ってありそうで意外と無かったテーマですよね。秀逸です。哲平クンって、やっぱりこういった泥臭いテーマのワイルド系の楽曲が一番似合うと個人的には思います！

一方で、「Ｋｉｓｓ・キッス・Ｋｉｓｓ」というオールディーズ風の可愛らしい楽曲も甘くさわやかに歌いこなす哲平クン。さっき言ってたことといきなり矛盾していますが（笑）、これもまた色っぽくて素敵なんです……。

１９８０年代以降は俳優として活躍されている渋谷哲平さん。後追い世代をも魅了する、ワイルドさと甘さを兼ね備えた凄腕なのです。

第5章

なんとも言えない、グッとくるこの気持ち……。すっごく「エモい」歌謡曲！



CamScannerでスキャン

「お姉さん歌謡」が大好物

秋ひとみ「哀愁ＢＯＹ」（１９８０）

歌うことに夢中になっていた10代の頃から、「子供っぽく可愛いらしい」よりも「大人っぽい」歌声に強く憧れていました。岩崎宏美さんや八神純子さんのような鼻に抜けるほんのり色っぽい歌い方がとても新鮮で、「どうすればお姉さんっぽく聴こえるか」をずっとカラオケで研究していました。自立しているような知的な印象を受けるのも、それらの「お姉さん歌謡」に魅かれる理由のひとつです。

さて、秋ひとみさんというシンガーをご存知でしょうか？　私にとっての「お姉さん歌謡」の最高峰、知る人ぞ知る名シンガーです。１９７８年に「アンカレッジ経由パリ行き」でデビュー。「ひとみ」という名の通り大きなアーモンドアイが印象的な女性です。デビュー時すでに20歳だった秋ひとみさんは、10代でデビューした歌手には無い「お姉さん」な魅力がグッと詰まっているのです！

彼女のことはおそらく動画サイトで知ったのだと思いますが、その抜群のルックスにも魅了された高校生の私は、雑誌「GORO」のポスター付録をヤフオクでゲットして部屋に貼ったり、浅草のマルベル堂へ行ってプロマイド（マルベル堂では、販売している写真のことを「プロマイド」ではなく「プロマイド」と呼ぶのだそうです。この「老舗のこだわり」シビれます……）を購入したり、ゾッコンでした。

母性さえ感じられるファルセット・ボイスが美しく、歌声にパワフルさはないけれどそこに親しみやすさも感じられ、「近所の超美人なお姉さんが歌ってる」みたいな感じがたまらない！　ポスターを眺めながら「こんなお姉さんになりたいなあ」という強い憧れを抱いていました。

私のイチオシの楽曲は、6枚目のシングル「哀愁ＢＯＹ」（１９８０）。これが本当に名曲！　それ以前のシングルでは「幸せルージュをつけなさい」や「さよならによろしく」等、憂いを帯びた曲を多く歌ってきた秋ひとみさん。この曲は打って変わって都会っぽくてとてもオシャレ！　弾むようなピアノと美しいストリングスがとにかくさわやか。作詞と作曲はヤマハのポプコン出身のシンガーソングライター、高梨めぐみさんによるもの。歌詞も最高に良くて……。恋人がタバコをくわえる仕草、手を振る仕草、そして後ろ姿に哀愁

CamScannerでスキャン

を感じる……という表現がとてもリアルで切ない！
高梨めぐみさんによる繊細な描写と、秋ひとみさんによる「お姉さん歌謡的歌唱」の奇跡のコラボレーションによって、「80年代が始まったぞー！」という当時らしい垢抜けた雰囲気が感じられる名曲です。隠れた名曲になっているのが本当にもったいない！
あと「秋ひとみ」っていう芸名も好きなんですよねぇ。最高じゃないですか？「秋」っていう苗字、最初見たときあまりに美しくて感動しちゃいました。だから私の「町あかり」という芸名も（自分で考えたものなのですが）秋ひとみさんを参考にしました。この方がいなかったら「町あかり」は生まれていなかったのです！　一方的にですが（笑）、私にとって秋ひとみさんは恩人のような存在でもあります。
1982年以降、活動を休止されている秋ひとみさんですが、私が高校生の頃（それ以前から？）からファンの方々が集まるBBSが存在しています。当時の雑誌掲載情報やイベント時の写真などのお宝資料もたっぷり！　彼女のお誕生日をお祝いする投稿や、当時のファンの方の思い出話なども読み応えがあります。いま彼女がどうしているのかは誰もわからないけれど、「しあわせでありますように」と祈るファンの方々の温かい心がそこに詰まっているのです。

CamScannerでスキャン

グランプリ受賞でも「普通の女の子」の道を選ぶ……

小野香代子「さよならの言葉」(1977)

「歌謡曲研究所」のイベントでも取り上げた、ヤマハポピュラーソングコンテスト、通称ポプコン。1969~86年に開催された、アマチュアのミュージシャンがオリジナル曲で応募するコンテストです。出場を機にデビューしたアーティストは、八神純子さん、谷山浩子さん、中島みゆきさん、世良公則&ツイスト、CHAGE and ASKA、などなど挙げればキリがないほど。若手ミュージシャンが生み出した瑞々しい楽曲たちは、当時主流だったプロの作詞家、作曲家による分業制で作られた楽曲とはまた違った輝きを放っています。

まずは私が大好きな古田喜昭さんについて! 1973年に「Time」のメンバーとしてポプコンに出場後、80年代には「ときめきトゥナイト」や「パーマン」「魔法の天使クリィミーマミ」等のアニメソングも担当されている方です。そして個人的にツボなのが「ウェディング・ベル」で大ヒットした3人組シュガーの楽曲たち。「ウェディング・ベル」もそう

ですが、その後にリリースした「アバンチュールはルックスしだい」「私○にほリカ人」もまずタイトルからして気になりませんか?!　なんて個性的！　ちなみに第4章で取り上げたローラー族の「雅」という女の子の「大胆素敵」の作曲や、セイント・フォーの「ハイッ！先生」の作詞作曲もこの方によるもの。どれもキュートで毒があってユニークな名曲ばかり！　私も楽曲を作る上でとても影響を受けているミュージシャンのひとりです。

また、ポプコンと言えばやはり女性アーティストによる作品がとても魅力的。私の場合は高校時代から大ファンの八神純子さんはもちろんのこと、渡辺真知子さんの「ブルー」とか本当に大好きな曲です……。同時期にヒットしていた「勝手にしやがれ」とか「UFO」のような派手でキャッチーなものとはまた違った魅力の、とにかく心情に重きが置かれた楽曲ですよね。そして普遍的で古さを感じさせません。

70年代後半のヒット曲って、ポプコンの影響でこういったシンガーソングライターによる名曲が多く登場し、従来の職業作家による作品と混在し始めたっていう点が面白いですよね。

さて、ポプコン出身アーティストには現在も活動されている方も多い一方で、グランプリを受賞したにもかかわらずご本人の意思でデビューをしなかったシンガーがいらっしゃっ

たそうです。「さよならの言葉」「気まぐれでいいのに」という楽曲、八神純子さんがカバーしているので耳馴染みがありますが、これらが小野香代子さんというシンガーのものだと知ったのはつい最近。ご本人歌唱バージョンも一応音源化されているので聴くことができるのですが、息の使い方が巧みで独特のグループ感があり、感情を抑えつつも切なさがグッと伝わってくるものすごい表現力の持ち主……。すごい、こんなに歌の上手い人がいたんだ……。しかもアマチュアですよ！　あまりのレベルの高さにベテランの風格さえ感じます。

彼女は1977年の第13回大会のグランプリ受賞後に留学してしまい、当時レコードデビューはしなかったとのこと。こんな天才シンガー、もしデビューして活動していたら他にどういった名曲を生み出していたのかなあ……。そんな妄想をしてしまうほど、素晴らしいシンガーを多く発掘していたポプコン。私はまだまだ勉強不足ですので、引き続き掘り下げていったら驚くような発見がありそう……。研究しがいがありますね！　そうそう、もし私が70年代に高校生だったらきっとポプコンに応募していただろうなあ……。

70年代の女の子によるポエムの雰囲気

八神純子「窓辺」（1978）

毎年、夏になると福島県にある母の実家へ遊びに行きます。あるとき、本棚の奥から「おもいで　3年1組」と書かれた冊子が……。母の中学生の頃の卒業文集が出てきました。私とっては超絶貴重な文化遺産!!　ドキドキしながら開くと……、野球部男子のページには毛筆で大きく「忍耐・根性」、矢沢永吉ファンの男子のページには「YAZAWA」のロゴが丁寧に書かれていました。TVドラマは百恵ちゃんの〝赤い〟シリーズや、中村雅俊さん主演の「俺たちの旅」が人気だったようです。

その中でも衝撃だったのが「趣味：詩を書くこと」という女子の多さ！　多くの女子が、「卒業」「青春」「夢」「恋心」などをテーマに、中学生らしい瑞々しい言葉で自作ポエムを綴っていました。うちの母いわく「みんな当たり前のようにポエム書いてたよ。なんで流行ってたのかなあ？　やることなかったからじゃない？　スマホもなかったし」とのこと。

私が女性シンガーソングライターの中で最も尊敬する、八神純子さん。彼女による「窓辺」という楽曲は、まさにこの曲がリリースされた頃、1970年代後半の少女たちが書いていたような「ポエムみ」をダイレクトに感じることができる名曲です。

「みずいろの雨」「思い出は美しすぎて」「雨の日のひとりごと」など、ラテン風のヒット曲を多く生み出している八神さんにとってはお馴染みとも言える、ボサノヴァ風のアレンジ。美しいけどどこか切ない、八神さんのクリスタルボイスによるロングトーンがたっぷり味わえます。

八神さんのファーストアルバム「思い出は美しすぎて」のB面に収録されている曲ですが、私が知ったのは「コッキーポップ・コレクションVol.1」というDVDがきっかけでした。当時20歳になったばかりの八神さんは、ベビーフェイスながらまぶたには青みがかったアイシャドウが……。これがまた可愛いんだけど色っぽくて、当時高校生だった私はものすごく憧れました。

「窓辺にゆれるブルーのカーテン　ひとりみつめてひざをかかえる
レコードも今日は聴かない　ギターも今日は弾かない」

カーテンの色がブルーなのは、彼に会えないブルーな気持ちとリンクしているのかも

……。彼のことで頭がいっぱいになって、何も手につかなくなっている様子が伺えます。穏やかな曲調に反して、熱く燃えていますね……。歌詞がとにかくシンプルなので、それだけ妄想できる余地もたっぷりな曲です。

「逢えないときはどうして　こんなに長く感じるものなの
おそうじもみんな終えたし　コーヒーももうすぐ沸く」

余談ですが、今の若者よりも70〜80年代の10代の方が「コーヒーを飲める」率が高いんじゃないか?と思うんですよね。母いわく「学校帰りに喫茶店に寄ってもコーヒーしか置いてなかった」らしいです。コーヒーやタバコが大人っぽくてかっこいい、みたいな価値観も今はかなり薄れていそうじゃないですか?　だから歌詞の中でも「コーヒー」というワードの使われ方は、今後変わっていくのかもなあ。そのうち死語になっちゃったりして。

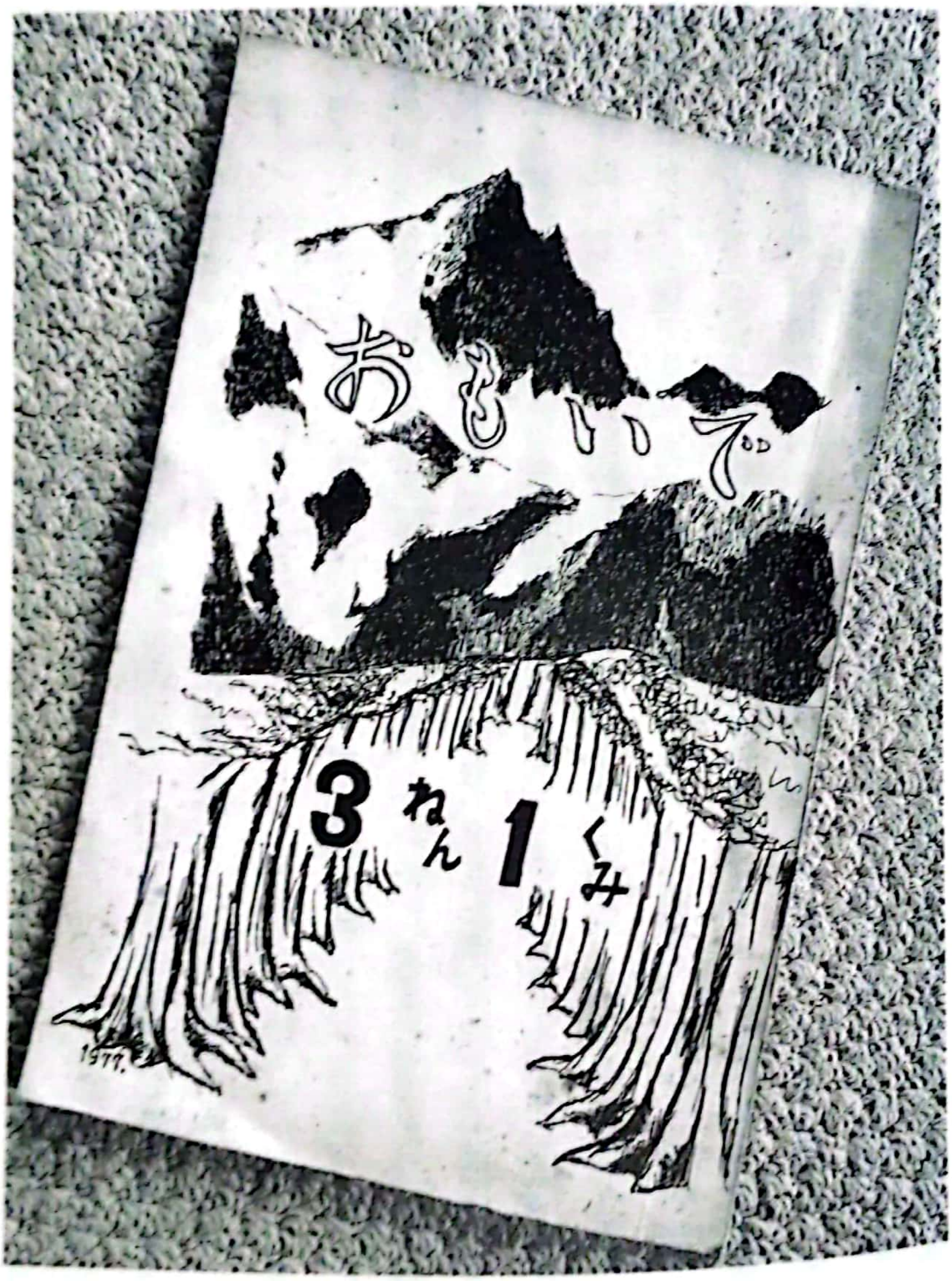
「ああ　あなたが今　ああ　ここにいたら
ああ　きっと言える　あなたが好き……」

この「ああ」の部分がこの曲の肝！　文字で書けばただの「ああ」ですが、音源を聴くと、女の子が彼に会えなくてちょっと拗ねているような、切ない気持ちがこの「ああ」のたった2文字にギュッとつまっているんです！　胸キュン……。

こういった個人的な恋心を述べたようなポエムって、今も「ポエツイ（ツイッター上のポエムツイート）」だったり、インスタグラムでも類するものを見かけるような気がします。ポエムは昭和だけのものじゃない！　今も昔も変わらない！　よって「窓辺」は時代を越えて共感され、オトメたちの心を熱くさせる曲だと思うのです。

ところで肝心の母の文集ページにポエムは無く、ミッシェル・ポルナレフがいかに天才かという解説がまるでウィキペディアのように書いてありました。さらに、平成生まれの私の卒業文集はというと、「3年間での経験を生かして、これからも頑張ります！」な〜んていうことしか書いておらず、ぜんっぜん面白くありませんでした……。

CamScannerでスキャン



母の卒業文集「おもいで　3年1組」

CamScannerでスキャン

シティ・ポップはあたたかい

東北新幹線「Up and Down」（1982）

[illegible]

たれの大学生が通学途中に聴くには贅沢すぎるほど（笑）アーバンでオシャレな世界観です。

その頃受けたレコード会社のオーディションで「あなたが思う、歌が上手い人って誰？」と聴かれて「いしだあゆみさんです！」と答えたのも覚えています。さすが名女優ならではの「都会でひとりで生きる女性」を見事に演じ切った素晴らしいボーカルを味わえる作品です。

次にハマったのは女性ボーカル「RAJIE（ラジ）」のアルバム「HEART to HEART」（1977）。これはネットで知って大興奮しながら再発CDを購入した思い出があります。透明感のあるキュートな歌声がとにかく絶品！　特に1曲目「Hold Me Tight」の夜空を飛行しているような爽やかさは、初めて聴いたときは本当に感動したなあ……。このまっすぐでピュアなボーカルを浴びていると心がポカポカしてきます。寂しい時には寄り添ってくれて、嬉しい時には一緒に喜んでくれるような温かさを感じるアルバムです。

最後は、山川恵津子さんと鳴海寛さんの男女デュオ「東北新幹線」のアルバム「THRU TRAFFIC」に収録されている「Up and Down」（1982）。バンド、O.L.H（面影ラッキーホール）のライブを観に行った時、オープニングDJとしてSEX山口さんがこの曲

を流していたことで知りました。コケティッシュなボーカルにアンニュイなメロ！　カラッとしたブラス！　ビビーッと琴線に触れたため、会場で流れてる音をスマホで録音して、帰り道に歌詞を検索したりなどして夢中で調べたのを覚えています。山川恵津子さんによる歌詞も色っぽくて、思わせぶりな彼の態度に振り回される女の子の複雑な心理描写がムズムズで最高です。ちなみにこのアルバム「THRU TRAFFIC」は2020年6月からサブスクでも聴けるようになりました。パチパチ！

私がシティっぽいものを好んで聴き始めたのは大学生になってからで、わりと遅めでした。その頃はまだまだ思春期を引きずったような憂鬱さを抱えていたし、進路も不安だったし、あの甘く切ないサウンドが心境にすごくマッチして胸に響いたんですよね。よく代々木公園に行って、ひとりで聴きながら缶チューハイ飲んだりもしたなあ（笑）。

シティ・ポップはその名の通り「洗練、オシャレ」がテーマのサウンドですが、全然気取ったものではなくて、人の心を慰め、優しく支えてくれてくれるパワーがあるように思います。今このジャンルの音楽が世界中に求められ、愛されている理由はそこにあるのだと私は思います。

CamScannerでスキャン

ボサノヴァ歌謡は大人への階段

五十嵐浩晃「愛は風まかせ」(1980)

ボサノヴァ風のアレンジを施した歌謡曲が大好きなのです……。

コンピレーションアルバムなども出ていますし、このジャンルもファンがとても多い印象です。ユーミンの「あの日にかえりたい」から始まり、丸山圭子さん「どうぞこのまま」、尾崎亜美さん「マイ・ピュア・レディ」、長谷川きよしさん「別れのサンバ」、南佳孝さん「夜間飛行」……、やっぱりこのあたりはめちゃくちゃよく聴きました！　あとは、白いドレスを着た妖精のように美しい太田裕美さんが歌う「恋愛遊戯」なんて、最初聴いたときはそのあまりのラグジュアリーさに心臓を撃ち抜かれたようでした……。こんなにリッチな曲が大衆音楽として当たり前のようにテレビで流れていたなんて！

私が最初に触れたボサノヴァ歌謡はおそらくサザンオールスターズの「別れ話は最後に」だと思います。桑田さんってラテンがお好きですもんね。他にもサザンでは「SAUDADE

〜真冬の蜃気楼〜」もそうだし、中村雅俊さんに提供した名曲「恋人も濡れる街角」もセクシーなボサノヴァ歌謡ですね。さらにこれはサザンのサポート・ギター斎藤誠さんによる作詞作曲ですが、原由子さんの「おしゃれな女」なんかも超ボサッてて、桑田さんのコーラスも加わって最高に色っぽい1曲です。うん、私がボサノヴァ歌謡に目覚めたのはサザンの影響かも！

……と思ったけど、私、歌謡曲が好きなのを「ご両親の影響なの？」と聞かれることも多いのですが、親の影響は全然受けていないのです（とにかくインターネットを駆使してここまで来ました（笑））。しかし唯一影響を受けていると言えるのが、五十嵐浩晃さんのデビュー曲「愛は風まかせ」（１９８０）。「THE・ボサノヴァ歌謡」ですね。艶っぽい女性コーラスもけだるくて最高！　これはフラメンコギターが趣味の父がよく弾き語りをしていたので、小さい頃から耳馴染みがあったのです。だから私の「ボサノヴァ歌謡好き」は、幼少期にめちゃくちゃ（父バージョンで……）聴かされた「愛は風まかせ」の影響だったりして？

あとは、聖子ちゃんのファーストアルバム『SQUALL』に収録されている「潮騒」も大

好き。明るくポップな曲の聖子ちゃんとは違った一面、最低音がだいぶ低く、落ち着いた迫力のあるヴォーカル表現を堪能できます。

あ、あとキャンディーズの「ふたりのラヴ・ソング」も入れさせてください!! これはカーペンターズの「All You Get From Love Is a Song」のカバーで、和訳は作詞家の森雪之丞さんによるもの。「ボサノヴァ」って定義が難しいですが……、これは細かいリズムや演奏というよりも、とにかくミキちゃんの歌唱が「ボサノヴァ」なのです!! ウィスパーなボーカルがもう切なくて切なくてたまりません……。

そうそう。サンバ、ボサノヴァ歌謡といえば私が大好きな八神純子さんは外せませんね。「雨の日のひとりごと」「思い出は美しすぎて」はもちろんのこと、私のイチオシはシングル「みずいろの雨」のB面「目覚めたときに」。編曲はA面と同様、大村雅朗さん。

晴れた日曜の朝みたいなさわやかなテーマではあるものの、よく聴くと大人の恋愛を描いた歌詞だし、イントロのサックスも純子さんのボーカルもセクシーすぎるし、この曲を知った16歳の私にはちょっと刺激が強かったです(笑)。

こうしてあらためて聴いてみると、ボサノヴァ歌謡って大人っぽいテーマの曲が多いですね。特に10代のときはそんな「未知の世界」を垣間見られるボサノヴァ歌謡を、ドキド

キしながら聴き込んでいました。

ところで、私もよくボサノヴァのリズムで曲を作ることが多々あります。先日も大学生の女性シンガーにボサノヴァ曲を提供したばかり。だってこのストレス社会にピッタリだと思うんです！　今こそSNSを見る手を止めて、ボサノヴァ歌謡をたっぷり浴びてリラックスするべきだと強く主張しますっ。

CamScannerでスキャン

聖子によるエモい世界へようこそ……
松田聖子「トロピカル・ヒーロー」(1980)

聖子ちゃんには、高校生の頃から救われています。もちろん歌声を聴くことで心が慰められる……という意味でもそうですが、人間関係においても助けられているのです。

普段、歌謡曲ばかり聴いている私が同世代の友人とカラオケに行く際、悩むのは選曲。そんなとき「歌手名：松田聖子」で検索すれば、「青い珊瑚礁」「赤いスイートピー」「SWEET MEMORIES」など若い世代でも耳にしたことのある名曲だらけ。盛り上がるし、迷ったら聖子ちゃん！　なのです。特に高校生の頃は聖子ちゃんに助けてもらってばかりいました。

それとは別に、一人でカラオケに行くのも好きな私。そこでも聖子ちゃんを歌いますが、人の目を気にせず歌う曲のひとつが「トロピカル・ヒーロー」です。聖子ちゃんのデビューアルバム『SQUALL』に収録されており、アルバム全体のテーマである「夏」が感じられ

る一曲。だけど「夏の扉」「白いパラソル」「渚のバルコニー」のような明るく元気な楽曲とはまた違った魅力を持っています。

サーファーに片思いをしてしまった女の子の物語。80年代前半のムードが感じられる最高のテーマです。イメージの余地がある歌詞で、聴く人の想像を掻き立てます。大人っぽい雰囲気でありつつ、ハイティーンの繊細な心情がたっぷりつまったサマーソング。聖子ちゃんの歌唱ってどうしてこんなに人間的なのでしょうか……。少したいて歌う部分なんて聴いていて本当にグッときちゃいますが、きっと誰に言われたわけでもなく、聖子ちゃんは自然とそういう「人の心のツボ」にチューニングを合わせられる天才なのだと思います。デビューアルバムの時点ですでに高い技術力を有していることがよくわかる1曲です。

ジャケットも印象的で大好き！　18歳のあどけないお顔立ちに、憂いを帯びた表情。海から上がった直後のように湿った髪。「聖子ちゃんカット」ってパーマをかけているんだと思うんですけど、濡らすとこういうふうになるんですね。80年代の海水浴場はこういったクリクリヘアーの女性で溢れていたのかな？なんて想像するのも楽しいです。

さらに注目ポイントは、聖子ちゃんの薬指に光るゴールドの指輪。この細身のデザインが上品で儚くて、高校生の頃とても憧れました。聖子ちゃんは大人っぽいさりげないデザ

インのアクセサリーをよくつけていて、歌番組の動画やマルベル堂のブロマイドなど、目を凝らしてチェックしていました。雑貨屋さんで似たようなものを探したりもしたなぁ。

そしてこの曲には「ソルティ・ドッグ」という印象的なワードが登場。ソルティ・ドッグは、グラスのふちに塩がまぶしてあり、ウォッカをグレープフルーツジュースで割ったカクテル。しょっぱくて甘酸っぱい気持ちを、彼に伝えようということなのでしょうか？大人になってからはソルティ・ドッグを飲むたびに思い出している名曲です（まあ、こんなオシャレなお酒飲むことめったにありませんが!!）。

そして大人になった今は、同世代とのカラオケでも「トロピカル・ヒーロー」歌えちゃうなぁ。お酒を飲んでいる勢いで……。

ヒロリンでさえ緊張のあまり「どうぞよろしく！」

山口百恵「夢先案内人」（1977）

SNSでも、海外のオーディション番組の映像がバズッているのをよく目にします。最近は日韓オーディション番組も流行っていますね。中学生の頃から歌手活動に憧れていた私もオーディション番組には深い思い入れがあります。10代の頃に観ていたのは日本テレビ『歌スタ!!』（2005~2010）。そこで合格された木山裕作さんが2008年の紅白歌合戦に出場したのを羨望の眼差しで観ていました。

「歌謡曲研究所」のイベントでも取り上げた、昭和の人気オーディション番組『スター誕生！』や『君こそスターだ！』。おそらくこれらが日本のオーディション番組の元祖ですよね。よく調べてみると本当に多くのスターが輩出されていてビックリ！

まず、スタ誕の存在を初めて知ったのは明菜ちゃんの出場映像を観たことがきっかけでした。3度目の挑戦で歌った「夢先案内人」（山口百恵）はそのまま音源化できちゃいそ

CamScannerでスキャン

うなほど絶品……。オーディションってコンサートと違って完全にアウェーな訳ですから、とんでもない緊張状態のはずですよね。それでも余裕があるように見える表情の明菜ちゃん、すでにプロです……。そして後ろで司会の坂本九さんが会場の雰囲気を和らげようとリズムをとって踊っている様子が、もう、その優しさに泣けてきます……。ちなみに私も高校生の頃オーディションを受けに行ったことがありますが、験担ぎとして「夢先案内人」をよく歌っていたなあ！

あと「歌謡曲研究所」のイベントで一番盛り上がったのは、岩崎宏美さんの映像。決戦大会で小坂明子さんのヒット曲「あなた」をとんでもなく高いクオリティで歌ったヒロリンが、スカウトマンの札が上がる前の挨拶で「一生懸命歌いました。これからも頑張りたいと思います。どうぞよろしく」という一言を……。その最後の「どうぞよろしく」の言い方がデビュー前の女の子とは思えないほど、あまりに堂々としすぎていてみんなで大盛り上がり（笑）。どうやらあまりの緊張で息が続かず、「どうぞよろしく」の後に「……お願いします」と丁寧に言うことが出来なかったらしいのですが、その初々しいエピソードも込みで微笑ましい良い話ですね。あの歌声を聴いた誰もが「そんなに緊張しなくても絶対にスカウトの札上がるでしょ」とか思っちゃいますけど、参加者にとっては人生のターニ

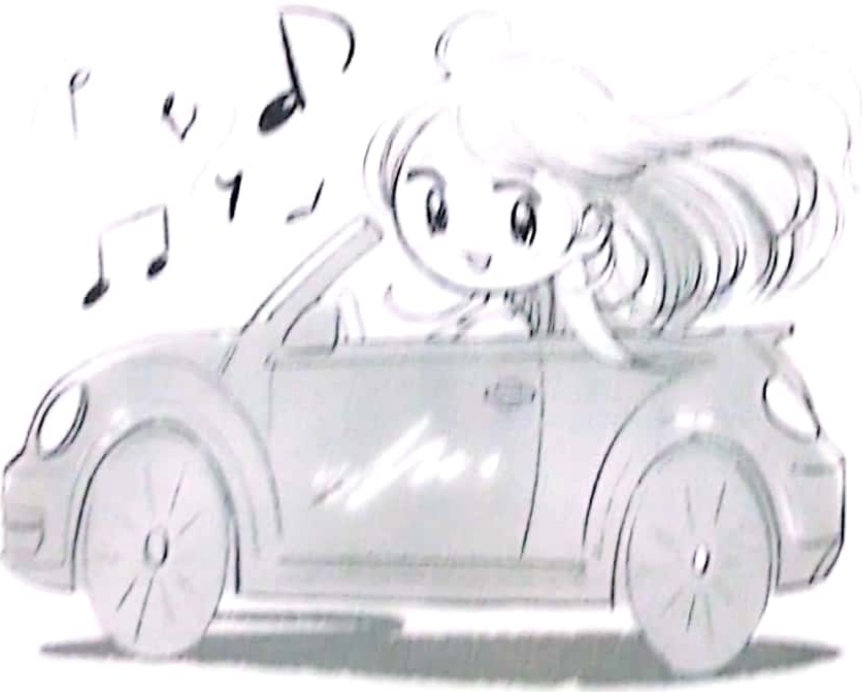
CamScannerでスキャン

ングポイントなのですよね。その真剣な眼差しにヒリヒリします。ちなみにこの『スター誕生!』も断片的にしか観たことない番組のひとつ。これも最初から通して観てみたいなあ……。

余談ですが、実は私も大学生の頃にニコニコ動画のオーディション番組に出たことがあります。都倉俊一さん、小室みつ子さん等が審査員という豪華さに惹かれ勇気を出して2012年に参加しました。そこでも歌謡曲好きを発揮して、ジュリーの「TOKIO」や舘ひろしさんの「泣かないで」という独特な選曲でカバーを披露したところ、変わりもの好きが多いニコ動視聴者の投票のおかげで実は決勝大会まで行ったんです(笑)。死ぬほど緊張しましたし、ライブとは違うあのドキドキは今も忘れられません。だからヒロリンの「どうぞよろしく」のエピソード、よーく気持ちがわかるのです!

第6章

温故知新！
超貴重な歴史資料的歌謡曲たち



CamScannerでスキャン

歌謡曲の世界へと導いてくれた3人組！

キャンディーズ「待ちぼうけ」（１９７６）

去年の夏、生まれて初めてスマホを落としてしまいました。誰とも連絡が取れない……。どうしよう！　失って初めてわかった、携帯電話の大切さ……。渋谷駅の落し物センターに向かいながら思ったんです。「携帯電話がない時代って、みんなどうしていたんだろう？」

私が最も愛する女性3人組シンガー、キャンディーズ。6枚目のアルバム『春一番』に収録されている「待ちぼうけ」という曲があります。この曲を聴くことで、携帯電話がなかった頃の様子を知ることができちゃうんです。

「5分ごとに時計を見つめ　足音するたびふりむくの

2時間待って来ないあなたを　ガラス越しに探す私」

出だしから衝撃的な事実！　来るかどうかわからない相手を、すでに2時間も待っています。自宅に電話をかけて出なかったら、その場所で待っているしかないんだなあ……。ち

なみにメインボーカルはミキちゃん。アルバム曲は、ミキちゃんのいろんな歌声を楽しめる点が魅力のひとつだと私は思います。

「誘ってきたのはあなたの方だわ　帰ってしまおうもう待たない
それでも席を立てないの　不思議ね」

これこれ！　私はこういう表現が大好きなんです。「ガラス越し」「席を立てないの」というワードから「ミキちゃんが喫茶店でひとりで寂しく紅茶を飲んでいる様子」が目に浮かぶところ！　詳細を述べず、少ない情報の中でリスナーがあれこれ想像できる余地のあるシンプルな楽曲こそ名曲！　というのが持論です。「紅茶じゃなくてコーヒーだと思う」とか「場所は代官山だと思う」とか、人によって違う解釈がなされて広がりが生まれるのもいいですよね。

「名前をふと呼ばれたようで　顔を上げた私の前を
恋人達がすぎてゆく　日暮れ」

言葉尻を投げ出したような歌い方が、まるで恋人への不満が表現されているみたい……。

さすがキャンディーズの音楽面でのリーダーと称されたという、ミキちゃんの表現力の高さを感じます。そして約束をすっぽかされたにも関わらず、明るく跳ねたリズム、陽気

CamScannerでスキャン

なブラスの音色に、むしろ私は切なさを感じるのです……。

私が初めてキャンディーズを知ったのは中学三年生の頃でした。それまではサザンオールスターズに夢中だったのですが、「もしかしたら、サザンがデビューした1978年頃の音楽が好きなのかもしれない……」と思いネットで検索。同年4月に解散した、キャンディーズの情報が出てきました。

さっそくベストアルバムを借りたところ、ジャケットの写真の3人のあまりの可愛さに一目惚れ！　黄色のミキちゃん、ピンク色のランちゃん、水色のスーちゃんのメンバーカラーもファンシーで、中学生女子にはドツボでした。

「年下の男の子」「春一番」など、キュートな印象のヒット曲をたくさん持つキャンディーズですが、大人のムードの「やさしい悪魔」「わな」なども魅力。バックバンドのMMPを従えて洋楽のカバーを激しく歌うコンサート映像は、初めて観たとき驚きました。キャンディーズって「カワイイ」だけじゃなくて「カッコイイ」顔もあるんだ！

かと思えば『8時だョ！全員集合』や『みごろ！たべごろ！笑いごろ！』などのバラエティ番組でコントも披露。ランちゃんが10円ハゲのついた男の子のカツラを被っているのを観たときも、ぶったまげました……。3人ともあまりに豪快でひょうきんで、紫のロン

CamScannerでスキャン

グドレスを着て「アン・ドゥ・トロワ」を歌っているシンガーと同一人物とは思えないです(笑)。

調べれば調べるほどキャンディーズがいろいろな顔を持っていることを知り、底なし沼のようにズブズブとハマっちゃいました。今だったら「マルチタレント」ということなのでしょうが、その一言で括っちゃうのはもったいないくらい、どの顔のキャンディーズも超一流なのです。

キャンディーズがきっかけで、インターネットを通じて歌謡曲が好きな同世代の子と仲良くなったりもしました。だから学校の友達と歌謡曲のことを話すことはなくても、さほど孤独を感じることはなかったんですよね。そこからキャンディーズ以外の歌謡曲にも触れていくようになりました。キャンディーズが、私の「歌謡曲」への扉を開けてくれたんです。

ちなみに、失くしたスマホは親切な人が駅に届けてくれたおかげですぐに見つかりました。たった数時間だったけど、出先で人と連絡が取れなくて、何も調べられないのは不便だったなあ!

ところで私はどちらかというと人を待たせてしまいがちなタイプです。だけど遅れると

きは「○分遅れます」ってLINEを送るし、もし約束したのを忘れていても、連絡をもらえばちゃんと返信します。キャンディーズの「待ちぼうけ」よりもずっとマシだよね?!

CamScannerでスキャン

2人の声が激似の「きょうだい歌謡」？

ポップコーン「ブルーロマンス薬局」（1979）
キューピット「地下鉄ファンタジア」（1979）

ある日新曲のデモ音源を作っていて、録音した自分の声のキーを下げてみたらなんと母親の声にめちゃくちゃそっくり!! よく「あかりちゃんと私、あまり似てないよね」と言っている母ですが、声質はとても似ていたのですね。最近は固定電話を使う家庭も減りましたが「家族の声が似すぎていて判別できない」みたいなエピソード、そう言えば聞いたことありますね。声帯や骨格の遺伝はもちろん、生活環境が同じであることによって似る場合もあると聞いたことがあります。

日本ではザ・ピーナッツ、こまどり姉妹をはじめ、ザ・リリーズ、狩人、サーカス……などなど、ごきょうだいならではのハーモニーを奏でるシンガーは昭和時代にもたくさんいます。今回はそんな「きょうだい歌謡」（？）の中から私が好きな方々についてピック

CamScannerでスキャン

アップしてみました。
まずは兄妹デュオの「ポップコーン」。『スター誕生!』合格を機に「ブルーロマンス薬局（ファーマシー）」（1979）でデビュー。その1枚のみで解散してしまったそうですが……。テーマが薬局という発想が最高! 超ツボです。「恋の病気を治す」っていうラブソング的なニュアンスも良いし、「心が風邪をひきました」「言葉で怪我をしたのです」というテーマに沿ったワードセンスも素晴らしい……。
話はだいぶ逸れますが、1998年頃に放送されていた『ふしぎ魔法ファンファンファーマシィー』(テレビ朝日系列）というアニメが大好きだったんです。魔女が営む薬局で、薬を調合すると妖精が現れる……という女児向けのファンタジーなのですが、短編アニメだったからか主題歌が無かったんですよね。だから「ブルーロマンス薬局」を聴いたときすぐに「あのアニメにピッタリじゃん!」と思い浮かび、平成アニメと昭和歌謡を勝手に脳内でコラボさせています……。
そしてイチオシの双子デュオ、「キューピット」! 以前「キャンディーズ・フォロワー」の話をしましたが、1978年デビューの彼女たちは「ピンク・レディー・フォロワー」という括りで語られることも多いようです。すごいのが、2人の声が同じすぎてユニゾン

部分がひとりの声にしか聴こえないという点……（笑）。そして楽曲がどれもとても面白くて〝70年代後半あるある〟も詰まっており、後追い世代を興奮させる要素満載なのです。

まずセカンドシングルの「テレパシーLOVE」がまさに「THE・1970年代」という感じ。ピンク・レディーの「UFO」もそうですが、この頃ってオカルトブームというか超能力とか宇宙人的なモチーフのものが大流行していますよね。こういう未知のものにときめいていた時代、なんか可愛いなあ。

4枚目のシングル「Love Beat 3-3-7」もこの頃らしいめちゃイカしたソウル歌謡。これ、和モノDJイベントとかで誰か流してないかなあ？　みんなで三三七拍子のクラップをして盛り上がる画が浮かびます！　作詞家、橋本淳さんによる詞もよく聴くと色っぽくて最高にアガります。

最後は3枚目のシングル「地下鉄ファンタジア」（1979）。スパニッシュっぽい要素も加わり、忙しない電車の往来が表現された疾走感溢れるアレンジ。激情的なサウンドと錯綜した都会での孤独というテーマのコントラストに哀愁を感じます……。

この頃、東京の地下鉄では74年に有楽町線、78年に半蔵門線が出来たばかりだったようです。「切り替わるアラベスク」という歌詞はそんな複雑化する路線図を表しているのかと

CamScannerでスキャン

思ったのですが、どうでしょう？

ちなみに、私が小6の頃には兄弟デュオの平川地一丁目の「とうきょう」がヒットしていました。当時中学生だった彼らがカバーした五輪真弓さんの「少女」もとても印象的で（「恋人よ」じゃないところが渋いし、めちゃ似合ってた！）、これは私が唯一リアルタイムで体験できた「きょうだい歌謡」と言えるかもしれません。

CamScannerでスキャン

ああ、あこがれの湘南歌謡

ラジオっ娘「茅ヶ崎サンライズ」（1982）
荒木由美子「渚でクロス」（1978）
江原由希子「ちょっとだけ」（1985）

根っからのサザンオールスターズ・ファンなこともあり「湘南」を神格化しています。

今までも聖地巡礼と称して何度も茅ヶ崎に行きました。サザン以前にも元祖湘南サウンドを生み出した加山雄三さんやザ・ワイルドワンズの加瀬邦彦さん等、湘南を描いたアーティストはたくさんいらっしゃいますが、1980年前後の女性ボーカルによる「湘南」にも趣があるのです。例えば石川秀美さんの「ゆ・れ・て湘南」（1982）のようにヒットした曲も素晴らしいのですが、今回はちょっぴり隠れた名曲をチョイスしてみました。

まずは、ラジオっ娘の「茅ヶ崎サンライズ」（1982）。ニッポン放送のDJとしてレ

ギュラー番組を担当していた3人組だそうです。この曲は以前も取り上げた、スペクトラムの新田一郎さんによる作曲。堀江美都子さんもあの高い歌唱力を駆使して歌われており、新田さんご自身もセルフカバーされていてそれもカッコいいのですが、個人的に一番のお気に入りはこのラジオっ娘バージョン！

初々しい3人の歌声と、アウトロ部分の「イエーイ！」というピッチピチの掛け声が、夢中で恋をする10代の青春って感じでこの曲にピッタリなんですよねえ。

次に、荒木由美子さんの「渚でクロス」（1978）。作曲が宇崎竜童さん、作詞が阿木燿子さんということで、特にそういった描写はないけれどそのサウンドから「横須賀の海かな？」と思っちゃいますね（だけど横須賀だったら浜辺じゃなくて港かな？）。スクランブル交差点でナンパされた主人公が、彼とそのまま海へ行き徐々に意気投合する……というストーリー。アスファルトの照り返しのムワッ……も、潮風の香りも両方味わえる重厚なサマーチューンです。個人的には、彼のことを「あの子」と呼ぶところがポイント！　そうですよね、男性に対して必ず「あの人」と呼ばなくたっていいのです。また、男の子に対して「可愛い」と言ってもいいのです！　なんか対等な感じがして良いなあと思ったんですよね。「まあ、付き合ってあげてもいいけど？」的な、男前な女の子をクール・ビュー

CamScannerでスキャン

ティな荒木由美子さんがやさぐれ感たっぷりに演じています。最高！

最後の湘南歌謡は、江原由希子さんの「ちょっとだけ」（1985）。タレントとして長年活躍されているYOUさんが所属していたバンド「フェアチャイルド」よりも前のソロ歌手としてのデビュー曲。最初はご本名で活動していたんですね。誰が聴いても「YOUさんだ！」と一瞬でわかるあの甘えたような可愛いらしい歌声は本当にすごいですね。一度聴いたら忘れられません。そして85年らしいあの過剰なリバーブが、小雨で海に霧がかかっているみたいでとても切ない……。あと「カーディガン」を「カーデガン」と言っているのも個人的キュン♡ポイントです（ジュリーが「酒場でDABADA」で「7時」を「ひちじ」と言っているのと同じタイプのキュン♡です（笑））。

ちなみに私のあこがれの湘南はカラッとした晴れではなく、じっとりと湿度が高くて潮風を浴びているとその肌がペタペタしてくるようなけだるい曇天の海。だからこのYOUさんの「ちょっとだけ」が特にお気に入りなんですよねえ。

ロサンゼルスの風と岩手の日本酒を感じる名曲？

山口百恵「喪服さがし」（1979）

ヒット曲をたくさん持つ百恵ちゃん。その中でも私のイチオシはこの「喪服さがし」という曲。これは2年前に岩手県の一関で知りました。イベントを主催してくれた酒蔵のマスターが、お店でこの曲を流していたんです。

そのとき、地元でDJをやっているお兄さんと居合わせまして……。そのワイルドな雰囲気に私も最初はビビって（笑）勝手に警戒してしまったのですが、この曲の話題で最終的に大盛り上がり。そんな良い思い出も込みで、この曲が大好きなのです。

「ブティック　デパート　貸衣装　泣いてるひまなど今はないの
レース　シルクに　ベルベット　知らせは突然　喪服さがし」

タイトルの通り、突然の訃報に慌てて喪服を調達するストーリー。ただ、この亡くなった「あなた」が恋人なのか、親戚なのか、友人なのか……。詳細は聴く人の想像にゆだね

CamScannerでスキャン

られています。だけどこの主人公、この状況に反してとても冷静ですよね。この相手との間柄によるものなのか、それとも主人公が相当クールなのか…。私は、この主人公が相当我慢しているようにも感じます。

「人の集まる時だから　お祭りごとには　変わりないわ
そうよ出来れば華やいで　陽気な調子で　喪服さがし」

以前、お気に入りのスナックで歌謡曲の話をしていたところ「1975年頃は暗いムードの曲が流行っていた」という発見がありました。1975年の日本レコード大賞曲「シクラメンのかほり」（布施明）、翌年の大賞曲は「北の宿から」（都はるみ）という点からも、「暗いムードの曲が、なんかオシャレ」というブームが見えてきます。

そのたった2年後、1978年のNHK紅白歌合戦では一転して「飛んでイスタンブール」（庄野真代）、「Mr.サマータイム」（サーカス）、「カナダからの手紙」（平尾昌晃&畑中葉子）など、海外旅行ブームだったのかな？と思われるような、開放的なテーマのヒット曲が登場。「喪服さがし」が発表された1979年のレコ大大賞曲は「魅せられて」（ジュディ・オング）。NHK紅白歌合戦では「YOUNG MAN」（西城秀樹）、「サンタモニカの風」（桜田淳子）、「アメリカン・フィーリング」（サーカス）が歌われるなど、これもまた

CamScannerでスキャン

海外志向が感じられるようなヒット曲がたくさん生まれた年であることがわかります。当時の経済やブームを知らずとも、ヒット曲を聴くだけでその時代の雰囲気が見えてくるのが歌謡曲の面白いところですね。

映画『サタデー・ナイト・フィーバー』が日本で公開された1978年にはディスコ風アレンジの国産ヒット曲も多く見られますし、「湿っぽいのはもう古い！　明るく楽しく盛り上がろう」という世相が、「喪服さがし」にも染み込んでいるのかもしれません。

ちなみにこの曲が収録されているアルバム『L.A. Blue』は、まさにロサンゼルスでレコーディングされたとのこと。こういった海外レコーディングもブームだったのでしょうか。景気良いなあ！　今では信じられないですね……。

「喪服」というワードからは想像出来ない、ビーチで聴きたくなるような軽快なアレンジ。ロサンゼルスの快晴の青空、海風を感じるさわやかなサウンドと歌詞とのギャップが不思議な効果を生んでいます。

ただ、前述のとおり私にとっては「岩手県で知った曲」なので、これを聴くたびに、岩手の美味しいお刺身と日本酒の味が思い出されるのです。

海外からのコメントも殺到のアニメ主題歌
シャイ「カンニング・モンキー」（1983）
藤原美穂「Streets are hot」（1986）

昭和のテレビドラマについてのコラムを連載していたことがあります。『熱中時代』『池中玄太80キロ』『スクール★ウォーズ』『男女7人夏物語』等、ドラマのヒットとともに主題歌も大ヒットしていてスゴイ！　今回はそんな映像作品の主題歌について、ピックアップしてみました。

まずは、「シャイ」というアーティストの楽曲「カンニングモンキー」（1983）。ジャッキー・チェン主演映画『カンニング・モンキー／天中拳』の主題歌。作曲はタケカワヒデユキさん。詳細を知らずとも「これ、ゴダイゴ？」「西遊記関連かな？（と最初は思っちゃいました）」と、タケカワ作品であることが一聴しただけでわかるその個性溢れるセンスに脱帽です！　サビの「イーヤァキッカッ……」のスキャットが小気味よく、ジャッ

CamScannerでスキャン

キーの軽やかなアクションが目に浮かぶようです！　……と言いつつ、映画作品は観たことがありません（汗）。えへへ……、作品とセットで聴くのが一番良いはずですよね。
リアルタイム世代だったら当たり前のように「上映されている映画を観て、主題歌を知る」のだと思うのですが、私はネット上で偶然知った楽曲を、その作品の詳細も知らずに長年聴き続けていることも多く……。こんな後追い世代は結構いるんじゃないかなあ？　私が怠慢なだけかもしれませんが（笑）。
次は、藤原美穂さんの「Streets are hot」（1986）。これもネット上で知ったのですが、そのあまりのカッコよさに感激。とにかく声がすごい！　ミステリアスなファルセットボイスから一転、Cメロでいきなり人が変わったようにソウルフルになるのもすごい！カッコいい！
ちなみにこれは『カリフォルニア・クライシス　追撃の銃火』という、松竹から出たビデオアニメの主題歌だそうです。テレビでレギュラー放送されていないアニメだそうで、それだけで新鮮なのですがそういうのって当時は流行っていたのでしょうか。鈴木英人さんやわたせせいぞうさんのような、影やハイライトが実線で描かれているデザインのアニメーション。これまたエイティーズっぽくてオシャレです。そして久しぶりにアニメのオープ

CamScannerでスキャン

ニング動画を観ようとYouTubeを覗いたら、海外の方からのコメントで溢れていました。以前はこんなことなかったのに！　きっとこれも今「シティ・ポップ」として世界中から注目されている1曲なのですね。

最後に、私が一番大好きな映画『男はつらいよ』について。渥美清さんが歌うあの有名な主題歌は実は何度も録り直されていて、歌詞が異なるバージョンも含めて何パターンも存在します。

例えば第3作『男はつらいよ　フーテンの寅』は珍しくキーが高いバージョンで、これが意外にも「股旅」っぽさが出ていて味があるんです。あと、後期の作品の落ち着いた寅さんの歌声も好きですね。

こういった、役者さんが歌う歌って趣があって大好き！　他にも、TBSドラマ『時間ですよ』の劇中で堺正章さんが歌う「涙から明日へ」も大好き。疲れた帰り道に口ずさみたくなるようなぬくもりのある名曲です。ドラマの中でドタバタ大暴れしている堺さんが最後にしっとりと歌うからこそ、グッときます。

ちなみに私は最近ドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』の再放送を観てキュンとなり、星野源さんの「恋」をずっとリピートしているのであります。昭和も平成も大好き！

CamScannerでスキャン

乙女たちによる男気溢れた「いぶし銀歌謡」
西村まゆ子「ひと恋初めし」(1978)
神田広美「ドン・ファン」(1978)
秋川淳子「南南西」(1978)

大きなキメがたくさん入っていて、マイナー調で重厚なアレンジ。歪んだギターも印象的で、ブラスやストリングスも躍動感があって、演歌とは違う、ムード歌謡とも違う、アレですよアレ。一体、この音楽は何というジャンルに振り分けられるのでしょうか……?検索のしようがない! ここでは勝手に「いぶし銀歌謡」と呼ばせてもらいます。

例えば、宇崎竜童さんがいろんな歌手に提供してきた楽曲にそんな「いぶし銀」なものが多いですね。高田みづえさんの「硝子坂」や荒木由美子さんの「ヴァージンロード」、百恵ちゃんの「横須賀ストーリー」とか……。これで私の言いたいこと、伝わりましたか(笑)? 見得を切るようなキメが気持ちいい! 男気溢れてカッコいい! そんな「いぶ

CamScannerでスキャン

し銀歌謡」のお気に入りを選んでみました。

まずは、西村まゆ子さんの「ひと恋初めし」（1978）。イントロのフラメンコ風で情熱的なアレンジにアガります。作曲は三木たかしさん、作詞は喜多條忠さん。「恋人は？って聞かれたときにあなたのこと言いそうになる」とか「ふざけてても泣きそうになる」とか、繊細な10代の恋心を描いた見事なパンチ・ラインが炸裂！　純情だけどパッションを秘めている恋模様、美しすぎます……。そしてサビの最後のロングトーンが激アツ。つい、拍手が出ちゃいます。

次は、神田広美さんの「ドン・ファン」（1978）。これは吉田拓郎さんによる作曲で、作詞は松本隆さんによるもの。3フィンガーのカントリーっぽい軽やかさが、浮気者の彼「ドン・ファン」のフラフラした態度を表しているかのよう。そして間奏のギターが激シブのいぶし銀！　歌詞にブランデーの銘柄「レミーマルタン」が登場するのも、この曲を知った高校生の私にとってはドツボでしたね。あとこういう魅力的で浮ついた男性に近付くとこんな目に遭うんだな、という学びも得ました（笑）。歌謡曲は社会勉強にもなるのです……（?）。

最後は、秋川淳子さんの「南南西」（1978）。元は高田みづえさんのアルバム曲だそ

うです。後に島崎和歌子さんもカバーしています。これぞＴＨＥ・いぶし銀歌謡の名曲!!とにかく高い歌唱力、明るくのびやかな歌声でまっすぐな恋心を歌い上げています。

　これがまた、ド演歌の歌唱じゃないところがポイント。こぶしも少なめで艶っぽすぎることのない清らかなボーカルが、初々しいこの曲のストーリーにピッタリなんです。そして作曲家の「あすなろ」さんのことが長年気になっているのですが、調べても情報が全然出てきません。一体何者？　もしかしてすごい作曲家の別名義だったりして……？　という妄想まで始めています。あと余談ですが、この曲のジャケットの秋川淳子さんのまつげにも注目。とっても綺麗に上がっています……。

　偶然ですが、どれも１９７８年のリリースでしたね。そうそう、同年の大ヒット曲、中原理恵さんの「東京ららばい」（１９７８）なんかも「いぶし銀歌謡」と言えそう。モデルさんみたいにオシャレで都会っぽい雰囲気の中原理恵さんが、こういった重厚感のあるシブい楽曲を歌うというギャップにシビれます……。これらの曲の特徴は、歌っていて気持ちが良いこと！　今回挙げた曲にはカラオケ未収録のものも多いので、ぜひ増えてほしいな……。

あとがき

最後まで読んでいただいて「知らない曲も多かった！」という方もいれば「自分もこの曲、ネットで知ったよ！」なんていう方もいるかと思います。ヒット曲あり、隠れた名曲あり……といった感じで「なんでこういう選曲に？」と思われる方もいるかもしれませんが、正直何も考えず、大好きな曲を思いつくままに羅列したところこういった1冊になりました。私にとっては有名無名関係なく、すべて当たり前のように生活に溶け込んでいる愛すべき名曲たちです！

こうして私にとっての歌謡曲があるように、幅広い世代の1人ひとりの歌謡曲があっていいのです。ぜひ「あなたにとっての歌謡曲」もみんなで共有しませんか？

そんな、さらなる盛り上がりの予感がする昭和歌謡曲。私の宝探しはまだまだ続きます！

CamScannerでスキャン

町あかり（まち・あかり）
1991年東京都生まれ。シンガーソングライター。平成生まれながら昭和歌謡曲を愛する。2018年からフジテレビ『じゃじゃじゃじゃ〜ン！』でうたのお姉さん役として「あかりおねえさんのニコニコへんなうた」を担当。石野卓球が手掛けるテクノ調のへんな童謡を歌うお姉さんとして子供たちからの人気も高い。現在「インターネットTVガイド」で「町あかりの「テレビの仕事人に会いたい！」」を連載中。

CamScannerでスキャン